アリスとチェルシーの物語

すずね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アリスとチェルシーの物語

【Ｎコード】
Ｎ９３１５Ｌ

【作者名】
すずね

【あらすじ】
世界を見たいという理由から旅を始めた二人の女の子は、クラインという傭兵に出会いました。クラインを噂でしか知らなかった二人は、最初は恐怖心を抱きましたが、すぐにクラインが優しい人だと安心したのです。けれども、クラインが徐々に記憶を取り戻すにつれて、世界が変化していったのです。それが、自分たちの見たいと思っていた世界だったとは、二人には想像できませんでした。

記憶

「あ、ありがとうございます」
「助けてくれ、なんでもする……そう言ったな？」
「わたしたちに叶えられる望みであれば……」
「では、俺の記憶（メモリー）を戻してくれ」
「……はっ？」
「記憶を無くした。記憶を取り戻すために旅を続けている」
「記憶を戻してくれと言われても、わたしたちには無理よ」
「なら、金品を奪ってその辺に投げ捨てるだけだ」
「ちょ、ちょっと待って。それは困るわぁ……」
「なら、どうにかしてくれるのか？」
「……いっ、一緒に旅をしましょう」
「一緒に、旅を？」
「ほら、一人で旅をするよりも、三人で旅をした方が安全だし、気付くものも多くなるわ」
「……そうかもしれない」
「ねっ、決まり。それでいいでしょう？」
「……」
「ねっ、いい提案でしょう？」
「……いいな。それで決まりだ」
「やった！」
「助かったぁ……」
「それで、記憶を無くしたあなたのお名前は？」
「名前も覚えていない。他の奴からはクラインと呼ばれている」
「ク、クライン！？　スティンガー・クライン！？」
「スティンガー？　そう呼ばれたこともあったな」
「ヘルヴァルのクライン！」
「ああ」

「ゲンドゥルのクライン！」
「よく知っている」
「女神に守護された男！」
「召喚魔法（サモンマジック）が使えるから、そんなことを言う奴がいるのだろうな」
「最強の傭兵と呼ばれるクラインが……記憶喪失？」
「そうだ」

アリス・グラヴァスとチェルシー・ディアントは、世界を見たいという小さな理由から旅を始めた。
二人とも、カーンバル大陸の最北、コルキャ山脈の南、シェルシュットという小さな村から、深夜、誰にも見つからないように出立した。
理由は一つ。両親はもちろん、知人はみんな二人の旅を止めたためである。
閉鎖された空間で暮らす者たちにとって、若者が出て行くのは滅びの兆しであり、外部の者を入れるのは災いの兆しであると、迷信染みた長老の言葉を、みんな信じているからであった。
二人は村から四三〇ティキト離れたコレーヴァル王国の大都市アリオン・ケルティの、さらに南へ二二〇ティキトほど離れた山道を歩いているところで山賊に襲われた。
今までは剣術や体術、それにわずかながら魔法を使えることでその場をしのいできたが、山賊の数は二十人を越え、このままでは金品を奪われるどころではすまないと身体が震えた。
前後を山賊に、両隣を森に挟まれて退路を奪われた。
一か八か山の中に入っても、地の利がある山賊から逃れることはできない。
このままではあれやこれやされて投げ捨てられる……久しぶりに旅の恐怖を味わった二人は覚悟を決めたとき、なんと助け人が現れた。
神の奇跡だった。

山賊を倒せなくとも、山賊から逃げることはできるかもしれない。
目の前から、明らかに傭兵（マーセナリー）と言わんばかりの装備、二本の剣、短剣など帯びて歩いてきた――それがクラインだったと知ったのは、後のことだ。
最強の傭兵、スティンガーの愛称で恐怖される男。
その伝説は、世間と離れて旅をするアリス、チェルシーでも知っている。
多数の敵を相手にするとき、突き（スティンガー）というのは非常に危険な行為だ。剣が抜けなくなったら、次にやれるのは自分だ。しかし、突はほかの斬撃と比べて圧倒的な攻撃力を誇る。
確実に内臓を破壊、一種の一撃必殺。とどめをさすときに突きをするのはそのためだ。
クラインは、敵を一撃で仕留めるためによく突きを使うことからスティンガーと呼ばれるようになった。
逸話は他にもある。
コレーヴァル王国軍が傭兵を招集し、ナングル王国と戦争をしたとき、クラインはたった一人で三万人近い兵士を守ったというのだ。
他にも、召喚魔法で女神を呼び出し、圧倒的攻撃で敵を捩じ伏せたり、国を一つ滅ぼしたり、この大陸でクラインを知らない者はいないのではないのかと思うほど有名で、伝説として語られている男だ。
クラインは二人を見つけたとき、無表情で山賊の間を通り抜け、道を進もうとした。
二人にとっては、彼が誰でもいい、とにかく助けてほしい。溺れる者は藁をも掴む、である。
「助けてくれたなら何でもする！」
クラインの行動は早かった。
腰に帯びる二本の剣を手に握り、常人とは思えない速い動きで山賊を次々に殺した。
背を向けた者は火炎魔法（ブレイズ）で焼かれ、剣を振り上げた者は轟雷魔法（ブリッツ）

で焼かれ……アリスとチェルシーにとんでもないトラウマを与えた瞬間だった。
そんな伝説の人と出会い、一緒に旅することになったことは、うれしいのか怖いのか、二人にはまだわからないが、妙な期待感はある。
彼が伝説の男なら、今後の旅で様々な出来事に遭遇することができるかもしれない、というものである。
クラインと共に東のマリークスへと向かうこととなり、とりあえずその場で休憩してから、クラインの殺した山賊を、三人で両脇の山に投げ入れていた。
出立はそれからとなった。
マリークスは小さな村だが、この世とは思えないほど神秘的な滝、ウィゼンブートがある。
一生に一度は見ておきたい光景だと誰もが言う。
二人の目的は、世界のそういった光景を見て回り、旅をやめず、旅で死ぬことだと笑顔でチェルシーが説明するも、クラインは興味無さそうだった。
二人が向かう目的地はマリークスだが、クラインはそこから南のゼンペラ帝国に用があった。
クラインが言うには、三年近く傭兵まがいのことをしながら旅をしているが、最近になって自分がゼンペラ軍にいたという情報を得たらしい。その話をしてくれたのは、五十半ばの、ゼンペラ帝国出身の男だった。
「どうして記憶喪失に？」
返り血を浴びたクラインは、山道を抜けて小さな川で手や袖についた血を洗い落とす。
恐る恐る、尋ねたのはアリスだ。
短い髪を頭の上で束ね、青い旅衣装を着ている。腰に一本の短剣を帯びている。
どちらかというと、おとなしそうな性格に見えるが、旅をできる

活発さはある。
先ほどの殺戮に近いクラインの戦闘を見たあとで話を掛けることができるのだから、根性もある。
「それを知っていると思うのか？」
「そりゃあ、記憶喪失の原因がわかったら記憶喪失じゃないわね」
もう一人の女の子、チェルシーが軽く言う。
「気付いたら辺りには死体の山。手元には剣、体は血だらけだが傷はなかった」
「……なに、それ？　怖いです」
アリスがクラインからすっと離れ、ぎゅっと自分のスカートを握る。
金属製の、防御性の高いジャケットに、スパッツの上にスカートと、クラインから見れば、あまり旅には向いていない服装をしている。チェルシーも同じような服装だが、腹を出して露出度が高い。いくら外衣（ローブ）を着ていても、不埒な輩に襲われても文句は言えない。
「俺も怖い。記憶はないが、体は動きを覚えていた。敵に襲われても対応できる」
「クラインさん、怖いね」
「俺が、怖い？　どこが？」
「だって、すっごい人を殺したわけでしょう？」
「殺したことないのか？」
「むっ……そ、そりゃ、旅には危険が付き物だし、襲ってこられたら対応するしかないし……」
言葉に詰まり、頭の耳と尾がしゅんと垂れてしまうチェルシー。
クル族のチェルシーは、人間と違って獣の耳と尾を持つ。
猫耳を持つクル族フェリス種のチェルシーは運動神経がよく、また夜目がきく。腰には短い二本の剣を持つも、鞘も柄も綺麗なところから、双剣はあまり使ってはいないようだ。
しかし、人間のアリスよりも、チェルシーは戦えるだろう。
獣人は、人間よりも柔軟で、戦いに適した身体をしている。

自然に、クラインは二人の力量を計っていた。
「仕方ない。俺だって、憎しみで人を殺したことはない、記憶を失う前はわからないが……」
クラインという男を、二人は噂でしか知らい。そのため、クラインというのは残酷で、冷徹で、無慈悲な男だと思っていた。
実際、戦いを目の前にして、無慈悲な男かもしれないと思った。
眉ひとつ動かさず、迷いもなく山賊を殺した。
けれども表情は優しい……無表情だが、そこから冷徹さは感じられない。感じられるのは、冷静な人であるということだけだ。
冷静だと言うことは、感情では動かない人。自分たちが殺されかけても、助けてくれないかもしれない。まさに無慈悲に傍観しているだけかもしれないが、腕は確かだ。
怖い人かもしれないけれど、決して危ない人ではない、むしろ安心できる。無意味に襲ってくることなどないと、二人は思った。
「知り合いに会ったとか、ないの？」
「何度か会ったことがあるも、戦場で見たことがあるかもしれない、という程度で、俺を深く知る者はいなかった。ゼンペラに向かうのも、ゼンペラ軍の戦闘衣装を着た俺を見たことがあると聞いたからだ」
「記憶を無くすなんて……どこで目が覚めたの？」
「目が覚めた？」
「つまり、どこで記憶を無くしたのかってこと」
「最北の、コルキャ山脈のさらに北、イーディング神殿の近く、森の中だ」
「わたしたちの村よりも一〇〇ティキトも北じゃない」
「山脈を越えるのは難儀だった」
「でしょうね。イーグディン神殿なんて、巡礼者以外行かないわよ？」
「なぜだろうな、イーディング神殿の神官も俺のことは知らないと言った。俺はイーディング神殿に寄らず、森に入った」

「謎ね」
「謎だ」
三人は山道を抜けて、比較的大きな街道に出た。
コレーヴァル王国とゼンペラ帝国を結ぶ、貿易のための交通路でもある。
行商人がそこら辺で商いしており、クライン一行は露店が簡易的に設けた椅子に腰かけ、各々食べたい物を注文する。
「世界を見たいから旅か……。うらやましい」
二人の旅の目的を聞いて、クラインは笑みを浮かべることなく、ただ頷いた。
「どうして？　旅、してるんじゃない？」
「俺は世界を知るためじゃない。自分を知るためだ。世界を見ることよりも、ずっと難しい」
「……難儀ね」
「難儀だよ」
クラインは注文したケルヴァブというイノシシの串焼きを頬張り、腰のポーチからマップを取り出した。
マップには赤で点や円が記されている。おそらく、クラインが訪れた場所であろうが、一つ、“ペケ”が記されている場所があった。
「キュリアス・イルミティ……」
「南の、小さな島だ」
「……行ったの？」
キュリアス・イルミティ、別名、神々の島。
ここから七九〇ティキトも離れ、一番近いのはドゥルノン王国のアーギュン軍港である。
キュリアス・イルミティへ行くことは規制されてはいないが、そこに行って帰って来た者はいない。けれども、船だけが無人で戻ってくる。
それが、乗って行った者が死んだという、神の慈悲なのだと誰かが言った。

「……二年前に、行ってきた」
「うそっ！？」
「生きて、帰ってきた？」
「不思議な島だった。この世界で、あそこほど美しく、醜い場所はない」
「……どっち？」
「口では表現できない。一度行けばわかる」
「行けないわよ。死んじゃうもの」
クラインは笑いもせず、マップでこれからのルートを確認してから、どのくらい掛かるかを計算する。それから腰につるした水筒に小さな青い色をした石を入れた。
「なに、それ？」
「水属性の結晶体。割ると水筒一杯の水になる」
「本当？　どこで売ってるの？」
尾をぱたぱたと振るチェルシー。
「サジリク」
「サジリク……」
エルフの住む森、サジリクに行くためには、グランシャスの門を通る必要がある。
グランシャスの門は、悪意を胸に宿して森へと進もうとする者を異次元へと連れて去ってしまう、エルフたちが守護の門と呼ぶ一種の魔導倶（マジック・アイテム）である。
実際に、その門を通った者を見た者は、門をくぐるなり消えたと言っている。
クラインがキュリアス・イルミティのみならず、サジリクにまで訪れていたとは、本当に驚きだ。
「エルフに属性結晶（アトリビュート・クリスタル）の作り方を習って、それ以来作って使用している」
属性魔法は、それぞれの属性を魔法と道具を使って攻撃や防御に使う。その属性、水、火、風、土などを結晶体にしたものを属性結

晶と呼ぶ。
水属性であれば、割れば水となり、火属性なら割ると炎となる。
水属性と火属性を混ぜれば、簡単に熱湯が作り出せる。
非常に高価で、職人も少なく、一部の貴族しか持つことのできない代物である。
二人とも、初めて属性結晶を見た。なんせ、属性結晶は、クラインが持っていた小指程度の大きさでも三カ月は悠々旅をすることができるほどの価値がある。
「クラインさん、本当にすごいですね」
「俺が？　……そうかも、すごいかもしれない」
「すごいですよ！」
クライン自身に興味を持つアリスと、クラインの持ち物に興味を示すチェルシー。
その二人に興味を持ち始めたクラインは、意外にもよい旅仲間となりそうだと思った。
アリスとチェルシーの二人は安心していた。強力な味方を得て、これからの旅になんの不安もなくなった、と。クラインはクラインでいつも通りだった。旅に不安に思ったことも、興奮したこともない。記憶が戻るまでは、そんな旅が続くのだと思っていた。

仲間

マリークスに到着したのは、クラインと出会ってから三日後のお昼だった。

村は観光地というだけあり賑わっており、街道で見かけた商人もそこにいた。

この賑わいは観光地というだけでもなく、偶然にもお祭りが開かれていたからだった。

五年に一度の、滝を守る守護竜を崇める儀式が、明朝に行うそうだ。その話を聞いたアリスとチェルシーは、当然見たいと考えていたが、部外者は決して見てならないと言われてしまった。

その日だけは滝への行き来は制限される。

「人だらけ」

お祭りのため、村のほとんどの宿屋は一杯だった。

唯一残った小さな民宿で休む三人は、狭苦しい部屋に並べられたベッドに座り、小さな窓から人通りの多い遠くの通りを眺める。

「お金があれば、いっぱい遊べるのに」

ゆったりと尾を揺らし、耳を垂れて残念な感情を体で表現するチェルシーに対して、アリスは荷物を整理して、自分の持つ路銀の残りを確認する。

「こんな村でなにするのよ？」

コレーヴァル銀貨数枚、アリスの全財産である。

路銀はその日その日に働いて稼いでいた。今までにやってきた仕事は数知れず、料理屋で料理を運んだり、宿屋で一時の看板娘になったり――どんな仕事をしてもきっちりこなせる自信は、二人にはある。

「クラインさんは、どうやって路銀稼ぎを？」

と、チェルシーがわざとらしく聞いてみる。

答えはわかっている。彼は傭兵兼殺し屋（マーセナリー キラー）に等しい仕事をしている。

一応、それらがどれほど稼げるのか知りたかった。
チェルシーの興味本位である。
「何でもやる。もちろん、賃金の多い方を選ぶ」
腰に帯びる二本の剣をベッドの上に乗せ、背負っていた小さなバックパックを下ろして中から革の財布を取り出した。
「紙幣（ノート）？　紙幣なんて、都市以外じゃ使えないじゃない？」
クラインの革財布には各国の紙幣が入っていたのだが、ほとんどの紙幣は都市部以外では信頼性がなく、露店などでは使えない。こういう村では、金、銀、胴でできた硬貨だけが絶対的価値を持つ。
いつ国が滅びるかわからない中で、硬貨を紙幣に変える者はいないし、各国が発券している紙幣も数は少ない。
「都市で紙幣が有効だ。それに盗まれることも少ない。硬貨はこれしか持っていない」
腰の、小さな袋の中身を手に出すと、そこには磨き上げられたゼンペラ帝国の金貨が山盛りだった。
「……ゼンペラ金貨！？」
「混ぜ物がないからな」
他の国では、金貨でも一割程度、つなぎのように銀を混ぜたりするが、ゼンペラ帝国は十割金を用いている。
ゼンペラ帝国はこの大陸でも滅びる可能性が一番低く、硬貨の中では最も信頼性のがある。
「どうやったらそれだけ稼げるのよ？」
思わず手を出しそうになるアリスに、肩に手を乗せて制止するチェルシーであるが、それでも目に映るあの金色の硬貨は魅力的だ。
「貴族の護衛、それに傭兵組合（マーセナリーズ）の依頼」
「よっ、傭兵組合？」
傭兵に仕事を与える、裏の組織……誰もが知っている。世界中に隠された支部を持ち、傭兵組合が本気を出すと国だって簡単に滅びると云われている。
クラインは金貨一枚を二人に投げた。

「うわっ。な、なに？　くれるの？」
「一緒に旅をする以上、お互い助け合うことは必要だろう」
金貨を持ち、にんまりとしてしまう二人に、クラインは笑った。
そういえば、久しぶりに笑った。
以前はいつ笑ったのだろう。
……すこしだけ、昔を思い出した。
一人のときはまったく思い出せなかったのに、なぜだか思い出した。
隣には誰かいた、おそらくは女性。
自分の肩に手を掛けて笑っているようだ。そう、チェルシーとアリスのように仲が良かった相手だと思う。
顔は思い出せない。

『リオ……』

自分を呼んだのか、誰かを呼んだのかはわからない。
けれども、自分は笑っていた。
女性に釣られて笑った自分がいた。
「クラインさん？」
「……どうした？」
「いや、クラインさんの方がどうしたの？」
と、アリス。
「ぼうっとしていた」
と、チェルシー
「いや、なんでもない。今後のことを考えていた」
「ふぅん。ねぇ、わたしたち外に行くけど、どうする？」
クラインさんを一人にした方がいい、二人はそう感じたものの、あからさまに出て行くのも悪いと、一応は誘ってみるも、
「ここで待っている。遊んで来い」
わかりきっていた反応だった。

「そうする！」
うきうきと高揚し、部屋から出て行ったあと、クラインはしばらく扉を見続け、廊下に誰もいないことを確認する。そのあと、おもむろに腰のポーチから一枚の写真を取り出す。
だいぶ痛みがあり、端はぼろぼろだが、そこにはしっかりとクラインの思い出と呼べるものが残っている。
クラインと女性。
背景もなく、その二人だけが映っている。
目を覚ましたとき、残っていたのは剣と写真と死体だけだった。
この女性だけが自分の記憶の頼りだと思っているのに、さきほどのように記憶のすこしを思い出しても、この女性が誰なのかはわからない。
「俺は誰だ？」
女性は笑っている。
クラインの手を握って、満面の笑みを浮かべている。
「……お前は、誰だ？」
写真の女性は何も言わない。
クラインは、自分の記憶が彼女の名前を発することを強く願っていた。
願いを叶えてくれる神がいればの話だが……。
「……ちょっと不安なんだけど」
アリスが切り出したが、チェルシーはなんのことかという顔をして、
「なにが？」
「クラインさんとの相部屋」
「まさか、襲ってくるわけないじゃない？」
「襲われたら抵抗できないわよ？」
「別に、わたしクラインさんだったらいいわよ？」
アリスの積極性に驚きを見せるチェルシーは、すぐに表情を戻し、確かに、別にクラインならいいかと思う。

顔はチェルシー好みで、圧倒的な強さを持ち、味方につければ最高の戦力……。
すこしばかりにわがままがあるチェルシーは、自分に利益、不利益をよく考えてしまう。
旅を続ける中で、安心こそ最大の幸福。それを求めるためであれば、抱かれてもいい……いや、クラインだからこそ許せるのかもしれない。
「ひさしぶりに遊ぶんだから、楽しもう？」
「そうよねっ」
尾を振るチェルシー。
まったく、チェルシーの感情が表に出ることはわかりやすくてよい。喧嘩しても、チェルシーの気持ちがわかるわけだから、すぐに収拾がつく。
アリスが生まれた三日目に、隣の家でチェルシーが生まれた。
二人は北の寒い土地で育ち、身も心も強靭に成長した。
貨幣による物の売り買いがなかったため、基本的に物々交換となる。そのため、村の人たちは、基本的に狩りをして得物を捕まえたり、畑を耕して野菜を育てたりしていた。
アリスとチェルシーは狩りをするために弓矢、それに剣術を習った。
農作物を育てるよりもそれが楽しかったし、森の中に入るのが好きだった。
娯楽というものはなく、楽しみは狩りと、それに村から少し離れたところにある温泉くらいだった。
旅を続ける中で様々な楽しみを知った二人にとって、お祭りというものは人生の中でも最高といえる楽しみだ。これを逃すわけにもいかず、お祭りを頼むためにはお金が必要だった。
クラインがいれば、とりあえず路銀に困ることはなそうだ。
楽な方向を考えてしまうのは、今までつらい生活を送ってきたからだ。

「あっ、クックルの焼きとり」
「クックルって、北にだけあると思ってた」
町の中央を並ぶ屋台。
おいしそうなにおいを漂わる食べ物屋台がほとんどで、この村で取れる貴重な石を加工した装飾品もあるが、二人の興味は食べ物だけだ。
ゼンペラ金貨一枚ならここにある屋台の食べ物のほとんどが食べることができるも、まずは金貨を崩す必要がある。
焼きとりを頼んで金貨を差し出しても、お釣りがあるかどうかわからない。
ゼンペラ銀貨なら三〇枚、コレーヴァル銀貨なら五四枚、ドゥルノン銀貨なら一二〇枚の価値を持つゼンペラ金貨。
ここはゼンペラ帝国に近いが、コレーヴァル王国の領地の為に、多くの人がコレーヴァル貨幣を使っている。
コレーヴァル銅貨で三枚のクックルの焼きとりを金貨で買うわけにはいかない。
「どこか、高級そうなお店はない？」
人々でごった返す中、二人は首を伸ばして遠くを見る。
「宝石とか、買ってみる？」
「え～、宝石なんて狙われるだけよ。旅人に装飾品は必要なし」
「金貨渡すなら銀貨に変えて渡してほしかったわ」
「文句言うの？　あんな神様みたいな人」
「そうよね。命まで助けられた上に、財布まで助けてくれたもの」
クラインに文句を言うなど罰あたりだと、二人は人込みを避けての露店の裏を進み、とりあえず宝石などを売っている装飾品店の前に立つ。
「お嬢ちゃん、どんなのが好みだい？」
露店の主人が、小さな赤い宝石がついたイヤリングを見せる。
「何の石？」
「シェリーだよ。その中でも選び抜いた高級品だ」

二人とも女の子、いらないと口では言うものの、やはり宝石には興味引かれる。それにシェリーという石は高級品ではあるが、一般庶民でも買える程度の価格で売っている。
主人が持つイヤリングは、コレーヴァル貨幣でコレーヴァル銀貨三枚と、銅貨一枚。
主人の言う通り、シェリーの中でもよいものだったらこれくらいの値段がするものなのだろう。
ほしいという気持ちが二人を襲って、つい、イヤリングに手を伸ばしたとき、
「シェリー石は火属性の結晶体か、それ以外のなんでもない石だ」
「ク、クラインさん？」
二人の後ろから手を伸ばし、主人の持つイヤリングに手をかざすと、うっすらとシェリー石が赤く光った。
シェリー石が火属性結晶だとは知らなかった。それに、クラインがどんな魔法を使ったのかもわからないが、石は確かに淡く光った。
「本物だ。これくらいの大きさでこの値段なら妥当だ」
「俺は偽物なんて売らない。宝石屋グレッタ・ベンは信頼性が売りだ」
「グレッタ・ベン？　ああ、そうか」
「どうしたの？」
クラインは手にしていたブレスレットを外した。
金色の、白く丸い石が付いたブレスレットで、高価なものだと一目瞭然だ。
「おお、俺の店で売る品だ」
「この白い石はクレアイ・エンティルという、聖属性の結晶体だ。この大きさで、しかも天然なものはゼンペラ金貨五枚もする」
「ご、五枚も？」
「俺はそれを金貨四枚で売っている。最高の品物を売るのが俺のポリシーだからな」
「いい店だ。買うのか？」

「いや、あの、実話……」
と、なぜ宝石店の前で立ち止まったかの経緯を話す。
宝石はほしいが、旅をしていると狙われる。焼きとりを買うのに金貨は出せないなどである。
クラインと店主が笑った。
「気兼ねしたのか。おもしろい」
「お嬢ちゃん、両替して上げるよ」
主人は笑いが止まらないようだ。
大声を出して笑い、周囲の人が注目する。
恥ずかしさに顔を赤らめる二人に、店の主人は手を振って金貨を渡すように言う。
「す、すいません。あっ、でもそのイヤリング買います」
「いいのかい？」
「いいです、ほしいですから」
火属性結晶のイヤリングとのネックスレスを買い、二人は嬉しそうに身に付けた。
「よく似合う」
クラインが何気なしに言う。

『似合う？』

……また、何か思い出した。
人がいた。その人が聞いてきた。
それは、霧に映ったようで、すぐに掻き消えてしまった。
今の人は誰だろう？
誰かが言った、自分に向けて、くるりと回って、愛らしい笑顔を見せた。
たぶん、写真に写っていた女性だと思う。
「……クラインさん？」
「……なんでもない。なにか食べよう」

「そうしましょう！」
二人は笑みを浮かべ、手を上げて喜んだ。
そんな二人だが、クラインが一瞬だけ見せた真剣な表情を無視することはできなかった。
もしかしたら記憶が戻りつつある兆候ではないのだろうかと、勝手に想像してしまった。
クラインの後ろを歩くアリスとチェルシーは、この人の記憶を取り戻すためにはどうすればよいのだろうか考える。
チェルシーは耳と尾を持つ。
クラインはその耳と尾でチェルシーの心情がすぐに読み取れるし、今、何を考えているのかすぐにわかってしまった。
この子たちは、少なからず自分を気遣ってくれている。
本気で自分の記憶を戻そうとなっているのだろうか？　金品を奪って捨てるなどという言葉を真に受けているわけがない。
それなら、金を持っているからそう接するのか？
チェルシーにはその色がすこし見られるが、アリスは、もしかしたら本当に自分のことを気にしているかもしれないと思ってしまう。
そんな風に人を見られるようになったクラインは、今までの自分では考えられなかったと認識する。
やはり孤独に旅をするより、仲間がいる方がいいのかもしれない。
実際、楽しいし、素直に笑えるようになった。
けれども情はあまり見せたくないものだ。いざというとき、二人を切り捨てる覚悟を持たないと、旅はできない。
何よりも大事なのは、自分の命だ。
三人はクックルの焼きとりを頼み、広場の椅子に腰かけて頬張る。
広場の中央には水場があり、子供が楽しそうに水浴びをして、母親が和やかに子供たちを眺めていた。
水場の向かいに大きな樽が積まれており、男たちがビールを片手に騒ぎながら飲んでいた。
最近、酒を飲んでいない。

クラインは久しぶりに酒の味を確かめたいと、大樽の近くに行ってビールを貰う。
ビールを持って戻ってきたクラインは、
「……飲むか？」
ぽかんとビールを見つめる二人を見て、クラインが尋ねる。
「いや、わたしはお酒飲まないの」
「もう少し日が暮れたら、飲もうかな……」
基本的にクル族は酒を飲まない。代わりにマタームという果実を食べると酒に酔ったような挙動を見せる。また、オニオンを食べると中毒を起こす。
クラインの記憶……なぜだか、知識はある。
クル族は声が綺麗で発音が良く、詠唱する魔法は、人間の魔法よりも高い効果を発揮する。
「今日、明日はここにいるのだろう？　酔っても問題はない」
「え～、ちょっとクラインさん怖いですよ？」
上目づかいで顔を近づけるアリスに、クラインは相変わらず無表情で、
「なにが、だ？」
と、アリスの言いたいことをわかっていない様子で、素で返してきた。
ため息をつき、顔を伏せてしまったチェルシー。
クラインは、戦いになると鋭く、私生活では油断して鈍感になる男だ。
なんてことだ、そんな風にクラインを見る自分がいるとアリス顔が赤くなる。
自分は、クラインに惚れた？
心でそう思った瞬間、アリスはクラインと目を合わせることができなくなった。それに気付いたのはチェルシーで、くすくすと笑いながら尾を振る。
それを見たクラインが、この二人は本当に仲が良いと釣られて笑

ってしまう。

『わたしたちは仲良し！』

また脳裏をよぎった女性の言葉に、真剣な表情になってしまう。
ビールを飲み干し、酔いに身をまかせようとした。
ずっとほしかった記憶を取り戻すことに、未知の恐怖感がある。
目指すところには絶望を待ち構えている。または越えられない壁がある。
今までは道の先に崖があろうが急流があろうと、たとえ死があろうとお構いなしだったが、こうやって何かを思い出すたびに、この二人の影響があるのだろう思うと、離れた方がいいのかもしれないと考える。
ただ、この子たちと一緒にいると記憶が戻ってくるというのは事実だ。
自分が求めたものが、この子たちが与えてくれる。
自分にとって、記憶を取り戻すことは本当に必要なのだろうか？
新しい記憶を作ればいいのだろうか？
初めて思い出し始めた記憶に、どうして戸惑うのだろう。クライン本人にもわからない。
クラインは二杯目のビールを飲み、クックルの焼きとりを食べる。
それから三人で村の中を歩いて見て回り、森の中の綺麗な泉や、その先にある、目当てだった滝を見た。
「綺麗ね……」
ここだけ、俗界を離れた幻想的な場所だった。
見上げれば雲の上から水が轟々と音を立てて落ちてくる。
滝の近くでは儀式を行うための神具が並べられており、滝に近づくことはできなかった。
「まぁ、明日があるわ」
その日の夜、クラインは結局五杯もビールを飲んだのに酔うこと

はなく、三人と一緒に酒場で酒を交しながら夕食を食べた。
クラインとアリスはワインを、チェルシーはマタームの果実を搾ったものを片手に乾杯をする。
クル族のフェリス種以外がマタームを食したり飲んだりしてもただの果実絞りだが、チェルシーのようなフェリス種が飲むと、
「……駄目、におい嗅いだだけで酔ってきちゃう」
あっという間に顔が赤くなり、全身に力が入らなくなった。
それでもマタームの魅力は強く、飲んでしまう。
酒とは違い、ただの果実絞りなので、飲み過ぎて気持ち悪くなるということない。
チェルシーはぐいっと一杯を飲むと、マタームで煮たすこし甘い牛ももを食べるとさらに顔が赤くなっていき、椅子の背もたれに身を預けながら話をする。
「明日は滝を見に行きましょう。早朝に儀式をするそうだから、隠れていれば大丈夫、すごいものが見れるわ」
「滝を守る守護竜を敬う儀式か……竜を見た者がいるのかどうか」
「そういうのは伝説ですよ？　素直に信用する人なんていませんよ」
「その儀式をすることによって、ここの連中は滝が、いや、水が今まで通りに使えると安心する。そういった意味合いが強いのだろう」
「そうでしょうね」
こうやってクラインと話をするのは初めてだ。
道中はほとんど無言なクラインも、酒場で酒を飲めば口数は増えるし、笑みを見せる機会も増える。
それにアリスは、クラインの旅の話が気に入った。
特に、戦争に参戦し、味方を守った伝説の話は、アリスにとって酒以上に酔わしてくれた。
その隣のチェルシーはもう駄目だ。完全に酔って、今にも寝そうだ。
「コレーヴァルとナングルの戦争は辛いものだった」
今いるこの村はコレーヴァル王国の領地である。

ナングル王国は、コレーヴァル王国の大都市アリオン・ケルティから西へ四百ティキト進んだところに国境がある。
戦争が起きたのは今から二年前のことで、今でもナングルとコレーヴァルの間ではぎくしゃくしている。
戦争の規模自体は小さく、局所的な戦闘が続くだけだった。
クラインも参戦した戦争であり、クラインの名を知らしめた戦争でもあった。
戦争が終わりに近いとき、ナングル王国は秘密裏に九万の兵士を集め、最終決戦を仕掛けてきた。
そのとき、コレーヴァル王国は各所に兵士を送っていたために、コレーヴァル軍の兵士も三万人しか集められなかった。
兵の数は同じでも、装備や馬の数でいえばコレーヴァル王国の方が有利だった。
けれどもナングル軍の兵士の多くは魔法を使えるために、実際、コレーヴァル軍は不利となった。
矢も届かぬ距離から魔法を繰り出し、コレーヴァル軍の戦力をあっという間に削ってしまう。
コレーヴァル軍にも魔法使いはいたものの、敵は全員、魔法が使えるわけなのだからその差は大きい。
ナングル軍は一気に攻めて来る。
ナングルの背には大都市ユークリッドと王都がある。
敵は背水の陣、一気に攻めて来る。
死に物狂いで掛かってくる者は恐ろしく、コレーヴァル軍が委縮する中、ある傭兵が現れた。
スティンガー・クライン……戦争で活躍したからこそ世間で有名になったが、その前から、傭兵組合ではその名を知らぬ者はいなかった。
強大な魔法を使うクラインは、天から槍を降らせ、地から火柱を上げ、戦いを挑む敵を駆逐した。
コレーヴァル兵士、ナングル兵士なら誰でも知っている伝説であ

る。
「それからが問題だった」
クラインは長々と話したあと、一息ついた。
「問題？」
ナングル王国は敗戦、ナングル王国の民の士気は低く、このままではコレーヴァル王国に吸収され、支配されてしまう。そのための対策として、捕虜を拒み逃れた残党兵がコレーヴァル王国の高官とクラインを暗殺するために動いた。
「狙われたよ。多いときは一日に七度も狙われた」
「七回も！？」
「三カ月で百人近くの刺客が現れた」
「全員、倒したの？」
「そうなる」
「難儀、ですね」
「難儀だよ」
ワインを飲み、ボトルを注文する。
「チェルシー、大丈夫？」
「……う、うん。もう大丈夫」
チェルシーはいつの間にか寝ていた。
マタームですぐに酔うフェリス種は、ちょっと眠っただけで酔いが覚めてしまう。
「そろそろ寝よう」
「まだ時間があるじゃない？　寝ちゃうの？」
「明日は朝が早い。寝た方がいい」
「アリス、クラインの言う通り寝た方がいいかも」
「どうしてよ？　まだ早いじゃない？」
「寝た方が楽しいかもよ」
「楽しい……？」
クラインにはまったくわからないことだが、二人はなぜだが笑っている。

むふふっと笑って何を企んでいるようだったが、二人は部屋に戻るなりばたりとベッドに倒れてしまった。
「あ～、クラインさん……」と、アリスが言った。
寝言なのかはわからないが、クラインは上着を脱ぎ、ちょうどよい酔いの中でベッドへと横になった。

事実

「レミナ……」

チェルシーがトイレに行こうと体を起こしたとき、声が聞こえた。クラインの寝言だとすぐにわかったのだが、旅人は寝るときに武器を手にするのが常識。

それがクラインとなれば、近づいたときに反射的に切り殺されるかもしれない。

恐るおそるクラインの元へ行くと、苦しそうに息をしていた。

「クライン、さん？」

頬に触れようとしたとき、突然、クラインが目を開き起き上がった。

びっくりしたチェルシーは、抵抗する間もなく、クラインに手を引かれ、ベッドの上で馬乗りされた。

何がなんだかわからない中、クラインの鋭い眼光と、その手に握る、月明かりに照らされたナイフが視界に入った。

殺されるの……？

恐怖がなかったといえば嘘だが、自分にナイフが向けられているという現状をすぐに理解することができず、、喉になにか詰まったのか、叫び声を上げることも手足をばたつかせることもしなかった――――できなかった。

「……チェルシー？」

クラインは、はっと息をもらして立ち上がり、チェルシーに手を差し伸べる。

怖くなったチェルシーは、今にも漏らしそうなほど震えている。

「すまない。癖が、抜けない」

視線をそらし、髪をかきあげて気まずい雰囲気を打開しようとし

ていたのが、チェルシーにはわかった。
「ご、ごめんなさい」
「いや、こっちこそ、悪かった」
クラインの手を握り、立ちあがる。
額の汗をぬぐい、ベッドに腰掛けるクライン。
「寝言、言ってた」
「……寝言？」
「うん、レミナって……」
「レミナ？」
覚えのない名前だ。
記憶を取り戻すための重要なキーワードであるはずなのに、レミナという名前はきっかけにはならないようだ。
写真に写っている女性の名前だろうか？　たぶん、そうかもしれない。
名前と顔が一致しないのは、何も思い出していない証拠。
先ほどは二人のふとした小さな行動を見て思い出したのに、どうしてだ？
「大丈夫？」
クラインが、また真剣な表情をしたので気になった。
「大丈夫。悪い……」
ナイフを握ったままベッドに横になり、すぐに寝息を立てて眠ってしまった。
怖い人だ。
体はまだ震えている。
早くトイレに行かなければ本当に漏らしてしまう。
たたたっと素早く部屋を出ていく。
チェルシーはトイレから戻って来てもクラインの側には寄らず、すぐにベッドに横になってしまった。
クラインのことは、忘れてしまった。

翌朝。

最初に起きたのはクラインだった。

旅の最中で、クラインは早くに起きて一人で稽古をしている。

今日もいつも通りに早く起きたのだが、アリスとチェルシーもその時間に目を覚ました。

「守護竜の儀式を見なきゃ」

旅をしている理由が世界を見たい、なのだから、その意味を忘れることはなかった。

「ちょっと待って、どこかに湯浴み場はないの？」

守護竜の儀式にはまだ時間があると、チェルシーはクラインを見る。

「この母屋の裏に井戸がある。布でも張れば十分だ」

「こんなところで裸になったら襲われるわよ」

「そうよ」

二人ともクラインを見る……睨む。

何か頼み事であるのかと、クラインは自分の装備を整えながら、長い時間考えていると、

「……見張りか？」

「そう、よくわかった！」

「護衛料、ゼンペラ金貨二〇枚を頂きます」

「えっ！　いつもそんなに貰ってるの？」

あまりのも真面目な顔だったため、二人は本気で請求されると信じてしまった。

「貴族なら、それくらいは貰う」

「わたしにもできるかな？」

「無理だ。傭兵も、信用性が命だ。腕っ節が強くても、素性のわからない者は雇わない」

「残念」

二人はタオルとベッドシートを持って裏に行き、クラインに言わ

れたとおりに井戸の周りにロープを張り、布を垂らして外から見えないようにする。
「見てもいいけど、変なことはしないでね」
服を脱ぎながら挑発に似たことをしてみるが、クラインからの反応がない。
興味なしか……すこし残念ながら、アリスとチェルシーが井戸から水をくみ上げる。
時期としては暖かい今日この頃だが、これを被るとなると、そうとう冷たい。しかも早朝ということで、その水の冷たさは、クラインにナイフを突きつけられるよりも怖い。
アリスがチェルシーに、チェルシーがアリスに水を掛けることにした。
「いくわよ？」
チェルシーが桶を持ち上げて、アリスがぐっと覚悟を決めたとき、ばさっと布を払ってクラインが現れた。
「！？」
全裸だった。
「ちょ、ちょっと！　変なことしないって言ったじゃない！」
「変なこと？　ちょうどいいから俺も体を洗う」
心臓が高鳴り、どきどきとしながら体を手で隠し、ささっとクラインから離れる。
クラインはそんなことにお構いなく、手に持っていた小さな赤い石を井戸の中に入れる。
「なに、それ？」
秘所を隠しながらすすっと近づき、井戸の中と、クラインの引き締まった体を交互に見てしまう二人。
「火属性結晶、お湯になる」
「へ、へぇ……」
むぅ、なんていい体をしているのだろう。
アリスとチェルシーが注目するのは井戸の中でもクラインの顔で

はない。
戦場を駆け巡ったであろう本物の戦士の体には傷一つなく、おまけに筋肉の鎧をまとっている。
それも魅力的だが、もちろん、男性にしかない、クラインの“得物”も魅力的だった。
「……変なことをするなよ」
「なっ！」
頭から湯気が出そうになったとき、井戸の中から湯気が立ち込めてきた。
「あっ、本当にお湯になった！」
桶の中に水を戻して、再び引き上げると、気持ち良さそうなお湯が湯気を出している。
「ほれ」
「うわっ！」
桶のお湯を二人に掛けてやる。
「あちちっ！」
思わず両手を上げ、ぐっと目を閉じて熱さを我慢したあと、恥ずかしさがなくなった。
お互い、裸でいるというのは体を洗うため、清めるためだ。不埒なことをするためではない。だからこそ、おかしい気持ちにならずいられる。いや、いなくてならない。
「火の神（ブレイズ）よ、育みをもたらす者（イグアイリティドゥ）よ。その力と恵みを我らに与えたまえ」
小さな声でクラインが詠唱した。
何が起きるのかと期待したとき、井戸からぶわっとお湯が宙へと飛び出した。
「すごい！」
お湯は竜のように尾を引き、三人の頭上で止まると、雨のように降り注いだ。
持ってきた石鹸で全身を洗うクライン。

「湯はすぐになくなるぞ」
「石鹸、石鹸！」
わしゃわしゃと泡立て、全身を豪快に洗うアリスと、タオルを頭に乗せてお湯の雨を防ぐ。
「頭から浴びるって、ちょっと嫌なのよね」
「フェリス種は水を嫌う」
と、クライン。
「濡れるのがあんまり好きじゃないの」
三人、裸で水入らずでなんだかいい気分になってきた。
アリスとチェルシーは、隙あればクラインを見ていた。
視線に気づかないわけのないクラインだが、ここで自ら行動することはない。
正直言えば、煩悩はある。けれども、肉体関係を持つことに躊躇していた。
最初から二人に混ざらなければよかったのだろうが、二人に冷たい水を浴びさせるのは可哀そうだったし、火属性結晶も一つしかなかった。すでに情を見せているものの、これ以上はあってはならない。　第一に、クラインも冷たい水を浴びるなんて勘弁だった。
情がわいたと、すこしだけ後悔しているとき、
「ね、ねぇ、クラインさん……」
チェルシーの甘い声、ゆっくりと近づいてくる。
……まずい、これは誘いの言葉に違いない。
クラインには優しく断る言葉が見つからない。
やられる前にやる……つまり、
「朝からは、駄目だ」
「！？」
見透かされての拒否宣言に、チェルシーは動揺した。
「どうしたの？」
体を洗い終えて、タオルで体を拭くアリスはなにも聞いていなかった。

棒立ちになるチェルシーを見て疑問視を上げる。
クラインは背を向けたとき、お湯の雨が止んだ。
そしてチェルシーはこう思った。
夜なら、いいんだ……と。
部屋に戻り、アリスがチェルシーの頭に両手を掲げ、
「大いなる大地に育みをもたらす風よ、その力をわたしにお貸しください……」
詠唱し、両手から風が吹く。
低級魔法で、ただ風を起こすだけの簡単な魔法。
風は冷たく、チェルシーは体が冷えると言った。
「慈悲を与えよ……」
クラインが呟いた。
追加魔法である。
アリスの風吹魔法の風が暖かくなり、
「あら、あんたいつの間に魔法覚えたの？」
「なにが？」
「風があったかい」
「うそ？」
「ほんと」
あれ、わたしってこんな魔法が使えたんだと思った瞬間、ああ、クラインさんか……。
クラインの方に振りかえると、クラインは自分の髪は乾いており、装備を整え終えていた。
「すこし、魔法を覚えたほうがいいな」
そう言って、クラインはアリスの髪を乾かしてやる。
……どこかで、こういう風なことをしたような覚えがある。
『髪、乾かして……さん』
そんなことを言われて、クラインが髪を乾かしてやる。

綺麗でさらさらした髪に触れ、風吹魔法で暖かい風が生まれた。
「……クラインさん、髪乾かすの上手」
チェルシーが真剣な顔をするクラインを見たのはこれで四度目だ。
時々こうなるのだろうかと思うが、道中では決してそんな顔を見せなかった。
無表情で、何を考えているのかわからない。その表情は決して真剣ではなく、いつもの顔を、というものだ。
「正直言うと、なにか思い出しつつある」
「えっ？　本当ですか？」
「お前たちと会ってから、記憶の欠片を拾うように思い出している」
「いい傾向じゃないですか！」
「そう、かもしれない……」
いい傾向なのかは疑問だが、この子たちが自分に記憶を与えてくれるのは確かだ。
三人は装備を揃えると早速滝へと向かった。
陽の光は弱く、人の通りもまだない。
滝の近くに来たとき、村人が櫓の前にたくさんの村人がいた。
滝の前には大きな櫓が立てられ、一人の若い少女が真っ白な巫女衣装を着て座っている。
村人以外の姿は見当たらず、クライン一行はよく見える、滝から少し離れた高い位置に移動する。
ここからなら、村人に見られる心配もない。
「あの巫女さんが守護竜を敬う舞でもするの？」
「怒りを治める儀式でもするのだろう」
三人とも、手にはミートサンドを持っている。
民宿の女将さんがわざわざ早くに起きて作ってくれたものだ。
それを食べながら、櫓の上で行われる儀式に注目する。
陽が出て、強い一筋の光が櫓を照らしたとき、巫女は鞘から刀を抜き出し、振り上げ、舞を始めた。
櫓の下で各楽器が音を奏で、音に合わせて舞う巫女は、確かに美

しく可憐だ。
白の巫女衣装は光に照らされ、幻想的にきらきらと光る。
巫女は優しさを主張するように舞うも、剣を荒々しく扱い、苛烈な印象を与える。
さて、確かに美しい巫女と滝を見ることができたが、儀式は舞だけで終わりなのだろうかと思ったとき、滝の中に何かがいた。
滝を裂き、ぐぐっと大きな何かがそこにはいる。
「……水神竜（シアン・ドラゴン）」
「水神竜？」
「ここ一帯の水脈を管理する神だ、と思う。本物だったら久しぶりに見る」
「竜が見れるの？」
「ああ」
滝から、青く透き通った、まるで蒼透石（サファイヤ）のような鱗に、空を飛ぶためにあるかのような長いひれを持った水神竜が現れた。
村人は一斉に頭を垂れ、地に額をつけた。
「初めて見るけど、竜ってすごいの？」
と、チェルシーが聞く。
「竜はこの世界を支える者を支えるとされている。竜を殺す者はこの世界を崩す者と云われているが、俺は竜を殺したことがある」
「えっ？　それっていいの？」
「わからんが、竜は一族である地を守ろうとする。だから、一匹くらい死んでも問題はない」
「そうなんだ……」
滝から現れた水神竜は、さほど大きくはなかったが、櫓の上に立つ少女を簡単に食い殺すことのできるほどの裂けた口を持っている。
櫓の前にまで移動した水神竜は、巫女の舞を見ているようだ。
水かきを有する両手を櫓に乗せて、今にも巫女を捕まえて口元に運びそうで、アリスとチェルシーは怖かった。
まさか、このまま巫女を食い殺すつもりではないのか？　という

ことに不安があったのだ。
「生贄の儀式ではないだろうか」
「生贄？　巫女が、生贄？」
「……あれは、もしかしたら水神竜ではないかもしれない」
「じゃあ、あれは？」
「神ではなく、水竜」
「水神竜とは違うの？　神様じゃないの？　あの巫女さん、殺されちゃう？」
「おそらく」
「助けなきゃ！」
「助ける義理がない。それに、彼らはこの儀式を続けてきた。他でも生贄を捧げ、地を守ってきたところは多い。手を出せば、この地が一生不作になることもある」
「そんな……」
　こんな儀式を何百年も続けていると思うと残酷なものだが、巫女一人でこの村が救われるのであれば、犠牲としては安いかもしれない。
　水神竜……いや、水竜がくわっと口を開き、咆哮を上げた。
　巫女が驚き、尻餅をついたとき、水竜は巫女を両手で握り、高々と上げた。
「きゃぁあああああ！！」
　巫女は手に持っていた刀を落とし、大きく口を開ける水竜を見て恐怖に失禁し、絶叫する。
　聞くに堪えなくなったチェルシーが、腰の二本の短剣を握ろうとしたとき、クラインが止めた。
「なに？」
「……様子がおかしい」
　水竜は、なんと巫女の脚を伝って落ちる巫女の聖水とも呼ぶべきものを口の中に入れている。
「うわ、気持ち悪い……」

「前に、破瓜の血を贄に地を守る獣がいると聞いたことがある」
「だってあれ……だよ？」
暴れる巫女を、村人は両手を合わせて見守っていると、水流が細い舌を伸ばし、巫女の股にするり伸ばす。
「いっ、いたぁい！！」
巫女の内腿を流れる鮮血を、水竜は器用に舌で舐めとっていく。
先の細い舌は何度も巫女の股をまさぐり、その度に巫女は痛みに声を上げるのであったが、しばらくすると、その声が痛みからくるものではなく、快楽から訪れる声だとわかったとき、血とは違うものが流れ始めた。
「う、うわぁ……なんか、ちょっと、いやらしい」
「う、うん。なんか、変な気分」
二人も顔を真っ赤にして、それからクラインの顔を見る。
しばらく見たあと、同じタイミングでクラインの下半身を凝視する。
「しっかり見ろ。これがお前たちの見たかった世界だろう？　俺たちは、水竜のような存在に支えられ、大地で生きている」
クラインは、こういうときでも冷静だった。自分は記憶を取り戻すために旅をしているのだが、こういう光景を目にすると、自分の目に焼けつける必要があると認識してしまう。
「そういう風に見れるクラインさんがすごいわ」
「……生きるために、人は手段を選ばない」
巫女が泣き叫ぶ中、水竜はそっと巫女を櫓に戻すと、もう一度だけ咆哮を上げてから、滝を登って姿を消した。
村の者が櫓に上り、巫女に何かと声を掛けている。
「……凄まじい儀式だった」
「うん。もう見たくないけど」
昨日と同じ広場の椅子に座り、朝方の儀式の感想を述べる。
「水竜も初物が好きらしい」
「なんであんな儀式があるのよ？　別になくてもいいんじゃない？」

「神を信じるか？」
「神様？　まぁ、クラインさんに助けられたときは信じたわ」
「神を信じても俺は助けなかった。お前が俺を信用したから助かった」
「……それで、結論は？」
「ここの連中は神を信じている。水竜が滝を、水源を守ってくれると本気で信じている。それでいいし、実際、水竜はいる」
「水竜が、本当に水源を守ってるの？」
「……滝から北に山脈がある」
「リーバットン山脈でしょう？」
「ここ周辺の水源はそこになる。また、流れる川は西、南、それに海に繋がる東へと繋がっている。分岐も多い」
「つまり？」
「たった一匹の水竜が水源を守っているとは思えない。水は人を支える重要な物質だ。絶対になくならない存在だ。竜はそれらを支えている」
「世界を支える者を支える……なら、やっぱりあの竜は神様？」
「その可能性もあるし、ない可能性もある」
「あの巫女さん、可哀そうに……」
「水竜は、おそらく水の流れを、川を守っていると思う」
「……巫女さんの犠牲は、無駄にはならなかったわけだ」
「第一、リーバットン山脈には強力な力を持つ光神竜がいる。あの水竜は、やはり川の主だろう」
「でも、わたし食われちゃうのかと思ったからびっくりした。あれだけで済んでよかったわ」
　ため息をつき、先ほどの光景を思い出す尾がぴんと張る。
　怖い体験でもあり、ちょっと腹をすぐられたような体験だった。
「次からは儀式をするところには行かないことだ。残酷な儀式だってある」
「どんな儀式？」

「臓腑を引き出し、獣に食わせる」
「……ほんと？」
「それも生贄の儀式だ。人間一人で不作を回避する」
「……難儀ねぇ」
「難儀だ」
昼前には村を出た三人は、クラインの目的地であるゼンペラ帝国へと向かう。
このとき、事件が起きた。
マリークスから離れ、ゼンペラ帝国へと続く街道に出たとき、クラインが突然、アリスとチェルシーを抱きかかえて林へと跳んだ。
「お、お昼からは……」
押し倒された。
まさか、ここでやるの？
「静かにしろ」
どうしよう、こんなところで……。
二人とも今にも心臓が飛び出そうなほどどきどきしたというのに、クラインの目は真剣そのもので、異常事態が起きたのだとアリスはわかった。
一方のチェルシーは目を瞑り、覚悟を決めていた。
「山賊だ」
「さ、山賊？」
「五、六十人はいる」
「どうしよう……」
街道の向こうから叫び声が聞こえた。
この街道はゼンペラ帝国とコレーヴァル王国を繋ぐ大きな道で、ここを行き交う人は多く、行商人ももちろん多い。
しかも、今回はマリークスではお祭りがあった。行商人はマリークスで稼ぎ、それからゼンペラ帝国に向かう。
山賊にとっては狙い時だ。
ここら辺を守るのはゼンペラ帝国軍で、駐屯地もあるはずだが兵

士の姿は見当たらない。
叫び声を聞き、目の前の、荷馬車の男がどうしようかと迷っていた。
引き返すべきだろうが、体が動いていない。
馬が危険を察知して暴れ出した。
「クラインさんなら、勝てるわよね？」
「ああ」
「助けないの？」
「俺に利益はあるのか？」
「ない……かも」
「お前たちも、助ける気はないだろう？　死にたくはないからな」
それはそうだが、なんてことだ、こんなに非力だったとは思わなかった。
アリスは苦虫を噛むような表情を見せ、チェルシーを見る。
「ちょっと、なにやってんの？」
「えっ？　あ、あれ？」
まだ目を閉じていたチェルシーは、起き上がり、二人が妙にぴりぴりしていると感じて姿勢を低くする。それから、アリスに事情を聞いて、
「助けて上げましょう」
「護衛料、ゼンペラ金貨五〇枚頂きます」
「クラインさん！」
「危険を冒してまで人を助けるのか？　報酬はないぞ？」
「人助けをするといつか見返りが帰ってくるわ」
「そういうもの……かもしれないな」
剣を握り直し、腰のポーチから神符を取り出す。
“封じ（セイル）”と記された神符を木々に張ったクラインは、
「ここから出るなよ」
「出るな？」
木々に神符を張り、結界を作ったクライン。

「ちょっと待って、わたしたちは？」
チェルシーは二本の短剣を握り、林から飛び出ようとしたら弾かれた。
木と木の間に見えない盾（シールド）が張られており、アリスとチェルシーは狭い空間に閉じ込められた。
「多数を相手にして戦うことなど、お前たちには無理だ」
山賊の、進軍のような多くの足音が迫ってきた。
さきほどまでおどおどしていた荷馬車に乗る男が引き返して、走って行った。
周囲が混乱し、人々がクラインとは違う方向へと走り去っていく。
「ちょっと、これ剥がれないわよ？」
神符を剥がそうとするも、神符は張ったクライン以外に剥がすことはできない。簡単な解除魔法で剥がせるのだが、二人にその魔法すらも使えない。
「きゃぁあああああああ！！」
女が後ろから刺され、殺された。
水を求める枯れた大地が、流れ出る鮮血を吸いこんでいく。
山賊の数は、クラインの思った通りに五十人ほど。
武器は剣、槍、斧と様々。
汚れたぼろぼろの服を着て、手には奪った金品を自慢げに掲げている。
まだ狩り足らない、殺し足りないと叫びながら走ってくるも、剣を握るクラインを見て先頭が立ち止まり、続く者も続々と止まって、笑いながらクラインを囲む。
「こいつ、騎士か？」
「どこかで見たことあるぞ？」
「どうでもいい。身包み剥いで川に捨てちまえ」
街道の隣には、マリークスの滝に続く川が流れている。
流れが早く、落ちたら助からない。
「……」

クラインがふっと笑った。
「んっ？」
クラインが、一瞬だけ消えたように見えた。
「あれ？」
アリスが、チェルシーに、
「今、消えたよね？」
「そう見えたけど……」
それは山賊も感じた。
一瞬消えたように思えたが、クラインは目の前にいる。それに、さきほどと同じ体勢だ。
問題はないと思ったが、クラインの目の前にいた男がうつぶせに倒れた。
「お、おい、どうした？」
仰向けにしてみると、胸に赤いしみのようなものがある。
「……血？」
どういうことだ？
山賊全員が、クラインの剣先を見る。
かすかに赤い液体がついている。
まさか、一瞬で殺したというのか？
クラインと山賊は七ティメトも離れている。斬撃を繰り出すには遠すぎるというのに、クラインは一瞬で移動し、胸を突き刺し、元に位置に戻った。
まずい、殺される。
全員が思ったが、すでに遅かった。
クラインはもう一本の剣を握りしめて、今度は見える速度で動いた。
けれども剣さばきを見ることはできない。
おそらく、剣で胸を突いているのだろうが、目で捕らえることなどできない。
スティンガーの異名を知るときだった。

覚悟を決めた山賊がクラインに掛かっていくが、クラインは体勢を低く、腕をすこしだけ動かすだけですぐに別の者に刃を向ける。
山賊は突かれたことすら気付いていない。なにかされたのだろうかと胸をさすった次には倒れた。
クラインの見えない動きに、一瞬遅れて敵が倒れる不可思議な光景を目の当たりにして、アリスとチェルシーは手が震えた。
「すごい……」
前に山賊に襲われたときは、感動するほど美しい剣術だった。
今回は違う。
クラインの本気？　いや、この程度ではまだ本気でもないだろう。
表情を崩さず、鼻先を剣が取り過ぎても微動だにしない。
「まさか、スティンガー・クライン？」
山賊の一人が言った。
すると、その言葉が伝染し、誰もがクラインの名を口にして臆し、引き始めた。
両手に握る剣に血はほとんどついておらず、返り血というものはない。
倒れた山賊は誰も血を流すことなく、絶命している。
「逃げろ！」
山賊が散り、逃げ出した。
クラインの周辺には死体が三十体近く転がっている。
疲れた様子を見せず、剣の先についた血を山賊の服でぬぐい、鞘に戻す。
「……すごい」
二人のいる林に行き、神符を剥がす。
「クラインさん、すごいですね」
「この剣術を、誰に教わったのかも思い出せない」
「スティンガーの異名は伊達ではないですね」
「この剣がなければ、あんな斬撃はしない」
「剣？」

クラインの腰には二本の長剣と二本の短剣、それにナイフを帯びている。
右利きのクラインは、左の腰に二本とも帯剣している。そのうち、鞘が白い、峰が並行な剣を見せる。
「魔剣だ」
「……はっ？　ま、魔剣？」
伝説に聞く魔剣は、もっと禍々しく、選ばれた本物の悪しか握ることのできないものだと、二人は思っていた。
それに、フェリス種のチェルシーは堕性の気配を感知することができる。
魔獣などに遭遇せず今まで旅ができたのもチェルシーのこの能力があったからだ。
クラインが本当に魔剣を持っているなら、チェルシーの尾は逆立ってぴんと伸びているはずなのだが、至って普通だ。
「魔剣の解釈を間違っている。魔剣は魔を斬る剣だ」
抜かれた剣の刃は鏡のようにアリスとチェルシーの顔を映し出し、平行な峰には繊細な呪文が刻み込まれている。それがどんな効力を発揮するかはわからないが、見ていると吸いこまれそうなほど、
「美しい……」
アリスが思わず手を伸ばしそうになったところで、クラインが鞘に収める。
「惹かれるなよ。聖性は魅惑の力がある」
「今ね、すごく綺麗に思えた。剣なのに、刃をぎゅっと抱きしめたくなった」
「危ない兆候だ。俺の剣に触れようと思うなよ」
「う、うん」
アリスは、昨日露店で買ったネックレスのシェリー石に触れて気を落ち着かせる。
「キュリアス・イルミティで、役立つだろうと頂いたものだ」
「神々の島……」

「興味が湧いたか？」
チェルシーはふるふると首を振る。
「常人が行けるところではない」
しばらくすると、ゼンペラ帝国側から兵士を引きつれ、馬に乗った騎士が現れた。
クラインが、死んだ山賊を川へと投げ捨てている最中のことだった。
「貴様がやったのか？」
「誰を？」
「この山賊を、だ」
十名近い兵士を引きつれてきた騎士は、馬上で残った数体の山賊を見て気付いた。
血が出ていない……。
先ほど通って来たとき、旅人や行商人が血を流して死んでいるというのに、山賊の体に傷はひとつも見当たらない。死んだというのに、まだ生きているように顔色がいい。
「山賊が奪った金品は」
「彼女たちが取り返した」
林の方でぐったりと座っているアリスとチェルシーは、山賊の奪った金品をかき集めていた。
死者から奪うという行為は、いくら相手が山賊でも気が引けるものだった。
兵士三名が近づくと、アリスは袋にぱんぱん詰まった盗難品を渡す。
「おい、それもだろう？」
「えっ？　なに？」
兵士の一人が、チェルシーがつけていたシェリー石のイヤリングを指す。
「ちょっと、これはわたしのよ？」
「嘘をつくな」

無理やり奪おうとしたので、二人は立ちあがって抵抗すると、騎士は剣柄に手を乗せて睨む。
「あれは彼女たちの者だ。兵を下がらせろ」
「そうはいかない。盗難の可能性もあるし、お前たちも素性の知らない……」
そのとき、一人の兵士がクラインを見てはっとなった。
騎士の側に移動し、こそこそと耳打ちをする。
「クライン？　スティンガー・クラインか？」
騎士が尋ねる。
「そう、呼ばれている」
そんなことを聞いて、手を伸ばしかけた兵士が止まり、隊列に戻ってクラインを睨む。
「コレーヴァルの英雄、伝説の傭兵……名は聞いている。まさか、こんなに若い……」
突如、騎士は言葉を遮り、近づいてきた。
馬がクラインの目の前にいるが、微動だにしない。
騎士は馬上でクラインに目を細め、ついには馬から降りる。
太陽に光り、輝くブルーの長い髪はゼンペラ帝国には珍しい色だ。髪の色と同じブルーの瞳もあまり見かけない。
そういえば、自分も瞳の色は蒼い。
三十代手前といったところの、壮年の騎士は、鼻がつくほど近づいて凝視するも、クラインは表情を崩さない。
顎に手を当て、むむっとうねり声を上げる騎士に、
「どうした？」
聞いたとき、騎士ははっとなった。
「……メルヴィルおじさん？」
「？」
「メルヴィル・ファフス？」

故郷

俺を知っている？
しかも、おじさん？
「私です。カーセル・ゼリュッセ・ファルディレックス」
「俺を、知っているのか？」
「何を言っているのです？　私のことを、覚えてないのですか？」
騎士は興奮し、笑顔でクラインの手を取った。
「悪い、俺には記憶がない」
「き、記憶がない？」
「目が覚めたのは三年前。最北の、イーディング神殿だ」
「イーディング神殿……。私がおじさんと最後に会ったのは、今から二十年の前のことだ」
「……二十年？」
「昔から変わった人だったが、メルヴィルおじさんは歳を取っていない」
「待ってくれ。俺がお前のいうメルヴィルという人物だとして、二十年前？　俺が記憶を無くしたのは三年前だ」
どういうことだ。
俺がおじさん？　それに、二十年の月日が立っているというのに、俺は歳を取っていない……わけがわからない。この騎士、カーセルは何か企んでいるのか？
「わけがわからない」
「おじさんと会ったとき、おじさんは二九歳、つまり今年で四九歳。それなのに、全く老いていない」
話を聞くアリスとチェルシーもちんぷんかんぷん、意味がわからなくなってきた。
「俺は歳を取らないのか？　それとも、騎士様の間違いだ」
「間違いではない。私はおじさん憧れて騎士になった」

「そんな馬鹿な話があるものか。俺は、十七年も眠っていたというのか？」
「それは、私にはわからない。けれども、ああ、母が知ったら喜ぶだろう。母はあなたのことが愛していた」
「母？　愛していた？　俺をおじさんというからには、血が繋がっているのか？」
「母のことも忘れたのですか？　なんてことだ、おじさん、私の母はあなたの妹ですよ？」
「妹だと？」
ここでクラインは写真のことを思い出し、腰のポーチから写真を取り出してカーセルに見せる。
すると、カーセルは写真の女性を見て涙を流した。
「私の母です。昔は、こんなに綺麗だったのか……」
「これが、俺の妹？」
記憶を戻す絶好の機会だというのに、どうして思い出せない？
自分をおじさんと呼ぶ者がいる。写真に写っている女性は妹だという。
メルヴィル・ファフスという名前さえもわかったのに、なにも思い出せない。
どうしたというのだ、なぜなにも思い出せない。
久しぶりに感情が現れそうになった。
悔しい。思い出せない自分が憎いと思ってきた。
「母は、あなたが姿を消してからずっと泣いてばかりでした。そして、昨年の夏に、病で亡くなりました……」
「なんだと？」
「母が床に伏せてから、ずっとあなたの名を呼んでいたのです」
騎士は子供のように泣き出した。
アリスが気を遣い、ハンカチを渡すと、すまないと一礼して涙を拭く。
「クラインさん……」

記憶が戻らない。
「俺の妹の名は？」
「エリスです」
……リオでもなく、レミナでもない。
写真に写るのは自分の妹、エリス……。
では、リオとレミナは誰なのだ？
カーセルの言うことは整理できた、自分がどんな状態なのかもわかった。
あとは記憶だけだ。
二人と出会って、少しずつ何かを思い出してきた。小さなきっかけで思い出すのだから、ゼンペラ帝国に行き、大きな事実を知れば一気に記憶が戻ると思った。
それなのに、自分の身内の話を聞いても何も思い出せない。
どうしてしまったのだ。
カーセルは涙を拭うと、一緒の行きましょうと言った。
兵士が山賊の死体を片付け、それから山賊に殺された人から、身分がわかるものを探り、林の奥に弔った。
クラインはその光景を見ながら、あんな風に自分の弔われるのか……そんな関係のないことを考えていた。
ただ見ている。そうすることしかできず、それらが終わるとクラインはアリスとチェルシー率いて、ゼンペラ帝国へと歩き始めた。
「おじさんが戻ってきたと知ると、家族みんなが驚きます。ただ、記憶喪失ということには、もっと驚くでしょうね」
「俺は、今まで何をしていた？」
カーセルは馬を下りてクラインと肩を並べて歩く。それが楽しいようで、笑っていた。
「ゼンペラ帝国の騎士でした。たった二十歳で部隊を持ち、率いる凄腕の騎士」
「ク、クラインさんが？」
今の姿からは想像もできない。

無口で冷静で無表情のクラインが、騎士姿で兵士に命令をする姿など、アリスとチェルシーの頭では考えられない。
「優秀な騎士でした。子供の頃の私でもわかった。だから憧れました」
「俺が、騎士……」
「想像つきませんね」
アリスがそう言うと、クラインは頷いた。
自分でも、騎士をしていたなど考えられない。
コレーヴァル軍では、甲冑を着た騎士が馬鹿のように思えたほどだから、あんなものを着ることはないと思っていた。それなのに、過去の自分は甲冑を着て馬に跨っていた。
馬鹿だった違いない。
「おじさんの家は、まだ帝国内にあります。母が遺言で残しておくように言ったのです……。記憶、戻りませんか？」
「……すまない。色々と話してくれるのはうれしいが、まったく思い出せない」
「そうですか……ゆっくり家で過ごせば思い出しますよ。二十年ぶりの帰郷ですから」
最初の二年で、クラインは大陸を縦断した。
その際に、ゼンペラ帝国にも寄ったが、三日ほどで国を出た。そのあとに南の、神々の島キュリアス・イルミティに行って魔剣を授かった。
今まで危険だと入らなかった魔の森や、エルフの住む森に行くことができた。
そして北のイーグディン神殿に戻る行く途中で、ゼンペラ帝国で自分を見たことがあるという人物に出会い、アリスとチェルシーに会った。
今は、自分を知り、自分との血縁を持つ者が隣にいる。
記憶が戻らない、というより、徐々に、元から記憶がないと思えてくる。

「汗、出てますよ？」
「んっ？　ああ……」
いつものクラインとは違う。
なにか焦っているようだった。
アリスとチェルシーは不安になってきた。
クラインの記憶が戻ることはいいが、そうしたら、もう一緒に旅ができなくなる。
たった数日の旅で終わってしまうのだろうか？　なんだか、悲しくはないだろうか？
それに、クラインは明らかに、記憶が戻らないことに恐怖心を抱いている。
多くのことを知ったのに、何も思い出せないから苛立っている。
二人にはしっかりとクラインの心情が読み取れた。
ゼンペラ帝国領地に入ったとき、クラインたちはすぐに兵舎に行き、カーセルの話を聞くことになった。
「おじさんが姿を消したのが二十年前。突然騎士を辞めて、傭兵になりました」
「……」
兵舎に多くの兵士がいて、クラインを見て驚いていた。
あれが伝説の傭兵、スティンガー・クライン。
ゼンペラ帝国では騎士として名を馳せたメルヴィル・ファフス。
二つの名を持つ伝説が、ここにいる。
ぜひ話をしたいと、兵士はクラインを取り囲む。
「それからは何も情報が入ってきませんでした。何をしているのか、生きているのか、死んでいるのかもわからない。母は、ずっとおじさんを心配していたのです」
「そう言われても、俺には記憶がない」
「……そうですよね、すいません。ああ、そうだ。馬を用意します。すぐにゼンペラ帝国に戻りましょう」
「それは、いいが……」

自分の故郷がゼンペラ帝国と知っても何も感じないし思いださない。
我が家に戻ってもなんの記憶も戻らないかもしれない。
クラインの不安は募るばかりだ。
それに、自分の妹というエレンが死んでいたことに、何の感情も湧かない。悲しみもない。どうしてこうまで冷静なのだろう。
このとき、クラインはあることを思い出した。
キュリアス・イルミティから戻るときに、ある者に言われた言葉を……。

「記憶を取り戻すのではなく、作ればいい……」

言葉の意味を、まだ理解できていない。
二度と記憶が戻らないということなのだろうか？
駄目だ、久しぶりに苛立つ。
「馬を走らせれば、二日で都市に着きます。行きましょう。母にも報告したいですから」
「墓前に立つのは、あまり好きじゃない」
雰囲気が苦手だ。
死者の前に立つのは、なぜだが嫌だ。
「自分の妹ですよ？　記憶がなくても、何か感じませんか？」
残念なことに、クラインには何も感じなかった。
不安は多い。すこしの恐怖も感じる。でも、アリスとチェルシーがいると、二人の顔を見ると落ち着くのはどうしてだろう……。
カーセルは兵士に待機の指示を出すと、馬小屋から二頭の馬を引きつれてくる。
「アリス、チェルシー、馬には乗れるのか？」
「大丈夫ですよ」
ひょいっと馬に乗るアリスは慣れているようだ。アリスの背に乗ろうとするチェルシーは必死になっている。仕方なくクラインがひ

ょいっと持ち上げて、自分の背に乗せる。
「あ、ありがとうございます」
「……」
無言……なぜ？
「行きましょう！」
カーセルが進むと、クラインとアリスも馬の腹を蹴る。
クラインの服を掴み、揺れに身をまかせながら、クラインが無言になったのが気がかりになった。
無表情で、感情のないのがいつものクラインである。無言なことに疑問を抱く必要はないかもしれないが、なんだか悲しそうだ。
アリスも、クラインの隣で馬を走らせながら感じた。
怒っている？　違う、悲しい、寂しい……見たことのない表情。
怖い、感じがした。
陽が傾き始めた頃、カーセルは別の駐屯地に寄り、今日はここで休みましょうと言った。
ここに来るまで、カーセルは何度もクラインに話をしたが、頷くだけで口を開くことはなかった。後ろにチェルシーが声を掛けてもああ、とか、そうだな、などと上の空。何か考えごとをしているのかもしれないが、ここまで無視されると腹が立つ。
「申し訳ないが、部屋は多く取れない。仕切りをするので、メルヴィルおじさんと一緒で構いませんか？」
カーセルは必死になって駐屯地の司令官と話をしたが、五人部屋を一つしか取ることができなかった。
アリスとチェルシーは、今さら拒むことはなかった。
それよりも、クラインに注意してしまう。
今も心ここにあらず。声を掛けても、肩を揺さぶっても反応を示さない。
頭にきたチェルシーが頬を軽く叩いてやると、
「……どうした？」
「どうしたって、クラインさんこそどうしたんですか？」

「……記憶が戻らないのもそうだが、俺が今年で四九歳だ」
そういえば、カーセルがそんな話をしていた。
クラインが、十七年間も眠り続けていたとか、街道で言っていた。
「本当に、あのカーセルさんってクラインさんの甥っ子さんですか？」
「写真の女性と、顔が似ている気がする。それに、こんな大掛かりな嘘を言ってどうする？　記憶のない俺を手玉にでも取ろうというのか？」
そんなことをして何になる。傭兵として依頼をすればいい。あえて愛国心などを植え付ける必要などない。
「アリス、あの人、嘘を言ってるようには見えなかったわよ？」
馬に乗りなれないチェルシーは、お尻が痛いと何度も叩いて背伸びをする。
「そんなのわからないわよ。相手は騎士だし、権力だってある」
「俺を騙す理由がよくわからない」
「……寝首をかかれたりして」
と、アリスが言う。
「ちょっと！　怖いこと言わないでよ！」
「……いや、ありえる」
「ク、クラインさん！？」
「今日の夜は注意しろ。剣を手放すな」
「……」
固唾を飲み、真剣なクラインの目から視線を外すことができない。
用意された夕食に毒が盛られているのではないのか、クラインが食すまで二人は出さなかった。
湯浴みするときも、二人はクラインに一緒に入るように頼んだが、クラインは人目が気になると言って断固拒否。アリスとチェルシーは体をくっつけて短剣を手放さなかった。
いざ寝るというときも、クラインの近くにベッドを移動させ、クラインを挟んで眠った……眠れなかった。

クラインの寝息が聞こえたときに、やっと二人は眠ることができた。

※

「眠れましたか？」

結局、クラインが冗談を言ったのだと気付かなかった二人は、眠れずずっしりと疲れていた。

寝首をかられるなどはあるはずもなく、朝になるとカーセルが優しく起しに来てくれた。

「夕方にはゼンペラ帝国、都市ベルファルウに到着です」

ゼンペラ帝国に行ったことはあるが、都市ベルファルウには行ったことのないクライン。

ベルファルウは、階級が違いで済む場所も違ってくる。

都市の中心となる国立図書館の周囲には王族貴族が住み、その周辺を中流貴族が、その周辺を一般市民と、ドーナツ型で構成されている。

帝都バノクレックスは、ベルファルウから五ティキトも離れておらず、ベルファラウとの専用通路があり、帝王の顔を見ることができるのはバノクレックスに住む血縁の近い者と側近だけだ。

純血主義者が多いのもゼンペラ帝国貴族の特徴でもあり、外部の者をあまり受け入れず、ナングル王国が敗戦し、難民が発生したときも、ゼンペラ帝国は受け入れを躊躇した。

そこの騎士となるということは、貴族か、もしくは兵士時代に相当の下積みの苦労を乗り越えて成り上がり貴族だけだ。

俺も、貴族だったのか？

クラインは、高飛車な貴族が嫌いであった。

「……いらない事実も出てきそうだ」

朝食を終えて、クラインが馬に乗ったときにそんなことを呟いた。

「えっ？　なんか言った？」

「なんでもない」
馬を走らせる。
しばらく森の中を走ると景色が変わり、平原に出た。
見通しがよい、すがすがしい場所だ。
西にライム砂漠、東に海があるゼンペラ帝国の領地は、人が住むにはなかなか苦しい場所だ。砂漠側に領地を持つ貴族の実入りは少なく、海側の貴族は貿易でかなり稼いでいる。
貧富の差も大きいものの、騎士、兵士の質が高く、決して戦争の相手にしたくない国ということで、他国はゼンペラ帝国と良い関係を築くため、維持するために外交を欠かさない。
「貧相な土地だ。これでは作物も育つまい……」
平原には木の一本もなく、動物もいない。草の色も黄緑色で、この土地が農作に適さないのは一目瞭然だ。
「この地は、十年前にゼンペラとコレーヴァルの戦争で傷ついた土地ですから」
「戦争だと？」
「覚えて……そうでした。コレーヴァルの外交官が、ゼンペラ帝国内で殺されたのです」
「まさか」
「二年で戦争は終結しました。結果として、コレーヴァルの外交官は一部の組織によって暗殺されたことがわかり、その組織の壊滅でことが収められたのです」
「宗教関係か？……」
「そうなります、秘密ですが」
やはり、十七年間も眠っていたのだろうか？
旅を続ける中であまり人と話さなかった所為か、そういう事実を知ることのないクライン。茫然と平原を眺める。
アリスとチェルシーは歴史を知っているから、ここで戦争が起きたことは承知だ。だから、ここが戦場かという程度にしか思えない。クラインにとっては、歴史が自分の知らないところで動いたことは

衝撃的な事実だったようだ。
あまり、いい気分ではないようだ。
クラインの背にいるチェルシーは、クラインからぴりぴりする感じがして、今すぐにでもアリスの馬に乗り移りたかった。
「……歴史が、だいぶ動いているようだ」
「コレーヴァルとゼンペラの戦争なら、わたしだって知ってます」
「俺は、目が覚めた瞬間から世界がわからなくなった。国の名前、都市の名前、人の名前……マップを手に入れてからすぐに世界の位置を知ることはできた」
「戦争の爪あとを、地図に残すことはあまりありませんからね」
昼に草原の中で休憩することになった。
クラインは残った水属性結晶を水筒に入れて、道中で飲みほしてしまったアリスに渡す。
「ありがとうございます」
「今までよく旅を乗り切ってきた」
「ずっと川沿いを旅してましたから」
「利口だ」
どこまでも続く草原の真ん中で、クラインはのんびりと寝ころんだ。
それに習って、チェルシーの寝ころぶと意外に気持ちいいものだ。
ベッドで横になるよりも、こっちの方がずっといい。
お昼も食べて大満足のこの状態で、目を閉じたら絶対に眠ってしまう。
「なんか、落ち着く」
アリスもチェルシーの隣で大の字になってみる。
「ああ、そっか、村を思い出すのよ」
「そっかぁ、ヘルシンの丘だ。あそこ、風が気持ちよかった」
カーセルは地に腰掛けて煙草に火をつける。
煙草をクラインに差し出すが、クラインはそれを断る。
以前、自分が煙草を吸っていたかわからないが、今は吸わなくて

もいい。
「前から、おじさんの煙草の興味があった」
笑って、煙草を吹かす。
メルヴィルおじさんはおいしそうに煙草を吸っていた。それがどうにもたまらなく、カーセルは兵士になるなり悪いことを覚えた。
「……本当に、記憶がないのですね」
「残念だが、まったく覚えていない」
「難儀ですね、クラインさん」
隣のアリスは笑顔だった。
その笑顔がまぶしい、満面の笑み。楽しそうにクラインの服を指でつつく。
「ああ、難儀だ」
難儀すぎて、泣けてくるよ。
眠そうなチェルシーを背に、戦場の爪あとの残る平原を進む。
魔法の攻撃で巨大なクレーターができた場所には草木が生えているものの、考えると、ここは戦場だった。
何百もの死体が埋まっている可能性がある。
こんな場所に村や町を作ることなどはできやしない。
「戦争なんて、最悪よ」
アリスは戦争を体験したことないが、人の死を見るのは嫌だ。死を生みだす戦争を、アリスは嫌いだった。が、クラインは違った。
歴史に必ず名を残すのは戦争だ。
戦争が生みだす犠牲は大きいが、戦争に勝利した国の成長は大きい。
戦いが好きなわけではないが、戦いの中では色々と考える必要がない。自分が生き残る、それだけを考えていれば済む。
コレーヴァルを守り、ナングルを破ったのも、生き残り、そして生きるための金を稼ぐ必要があったからにすぎない。
それを伝説と呼ぶ者もいるが、クラインには当然のことだった。
都市に近づくにつれて人の数は増し、都市を囲む巨大な防壁には

行列ができていた。
「こちらです」
騎士や兵士専用の、すこし小さめの門の前でカーセルが門番と話をして、クラインたちは都市ベルファルウへと入った。
「ゼンペラ帝国は初めてです」
「……」
ここは自分の故郷……のはずなのに、なにも覚えていない。
以前寄ったことがあるから、知ってはいるが、なぜだろう、ここでは何も得られないと感じてしまう。
人の多さに驚きぽかんと口を開けるアリスとチェルシーだったが、クラインもそんな感じだった。
ゼンペラ帝国は、背の高い建造物や、綺麗な装飾が施された家々が通りに並んでおり、外見上、もっとも美しい都市とも言われている。
「おじさんの家は向こうです。母に会う前に、寄って行きましょう」
クラインの家は中流貴族が住む、宮殿のような家が並ぶところにあった。
その内のひとつ、だいぶ古い造りの巨大な家の前でカーセルが足をとめた。
「ここです」
「……ここが、クラインさんのお家？」
「おっきいい……」
ここが、俺の家だと？
門の向こうには庭園が広がり、その奥に家があるが、これはまた大きい。
とても都市の中にある光景ではない。どこかのどかな町の貴族の家、防壁の中にあるような家とはとても思えない。
正面から見て、窓の数だけでも三〇を越え、玄関も二つある。
古いはずなのに、外装が綺麗なのはちゃんと整備しているからだろう。
「鍵は私の家にあります」

それからカーセルは都市の東の外縁部にある、広大な共同墓地に行く。
四人は馬を下りて、いくつもの白い墓石を通り越して、ひとつの墓石の前に立ち、カーセルは立て膝をついて目を閉じる。
享年四七歳……若くして死んだエリス・イーディ・ファルディレックス。
俺の妹。
「母さん、メルヴィルおじさんが戻ってきてくれました。床に伏せてから、ずっとおじさんの名を……やっと、戻ってきてくれました」
場の空気を感じて、アリスとチェルシーが離れようとした。
待て、と言いそうになったクラインは、側に誰かいてほしいと思った。
はっきり言って、誰かわからない墓前に立っているようで気まずい。
場違いなところにいる。
二人が去ってから、ただカーセルの背と墓石をみることしかできないクラインに、カーセルが、
「……メルヴィルおじさんは、これからどうします？」
頭を垂れたまま、カーセルが尋ねる。
「……ここが俺の故郷なのか？」
「そうです」
「……何も思い出さない。カーセル、俺は少しの間だけここに居ようと思う」
「ずっといてください。騎士に戻れるよう、私が話をつけてきます」
「カーセル、俺は騎士になりたいと思わない。……だから、騎士を辞めたのだと思う」
立ちあがり、振り返るカーセル。
何か言いたそうな顔をしたが、すぐに表情は消える。
「ここまで来て、俺の記憶は戻らない。それに、前に俺の記憶を知る者に会った。その者に、もう一度会ってくる」

「そんな……せっかく出会えたのに、行ってしまうのですか？　母が悲しみます」
「死者は、何も語らない。何も感じない。感じるのは、亡くした側だけだ」
「……なんだか、そういうところだけは変わっていませんね」
「そういうところ？」
カーセルは苦笑いを浮かべて、
「冷たいところです」
「……すこし話をしよう。俺が、どんな人間だったか」
「はい」
その頃アリスとチェルシーは共同墓地から離れ、道に並べられた椅子に座っていた。
街路樹の葉が白い、珍しい木の側だ。
「クラインさん、旅、やめちゃうかな？」
「……やめるかも。だって、ここが故郷だよ？」
「でも、記憶が戻ってないよ？」
「ここにいれば思い出すよ。それに、家族だっているもの」
「……そうだよね。家族がいるんだもの」
沈黙。
高級な外衣をまとった人たちが馬車に乗って目の前を横切っていく。
馬にまで装飾して、颯爽と走り去っていく騎士。
ここは自分たちの居場所ではない、そんなことを思わせる場所だ。
「……行く？」
「どこに？」
「西にあるウレータ」
「砂漠の中にある唯一のオアシス？　……そうよね、それが旅の目的だもの」
「絶景だって言うんだから、見に行かなくちゃ」
「うん、行こう」

たぶん、ここがクラインと別れの場だと感じた二人は、何も言わずに去ることを決めた。
出会ったたったの数日しか経っていないのに、クラインという存在がとても大きくなっていた。
惹かれていたというのが、正直なところだ。
別れ惜しいから、涙が出そうになる。
「……どうしたのよ？　行くわよ？」
「チェルシーこそ、先に立ってよ」
二人とも、なかなか立ち上がって前に進むことができない。
「……どうしよう、やっぱりあいさつしていく？」
「うん、そうしよう。区切り悪いもん」
「そうだよね」
「何が？」
「わっ！」
後ろから声を掛けられ、跳び上がってしまうアリスとチェルシーは、クラインの顔を見てほっとした。
先ほどまでの悩んでいた顔ではない、すっきりとした……いや、いつも通りの表情だ。
「脅かさないくださいよ！」
「脅かしたつもりはない。行くぞ」
「行く？　どこに？」
「俺の家だというところだ」
「あ、あの、クラインさん……」
そうだちょうどいい。
アリスが話しだそうとしたとき、チェルシーも今ここで別れを宣言した方が、後味はいいはずだと思った。
二人の心情を察することなく、冷たい表情のクラインに、アリスはなかなか次の言葉を発することができないでいる。
「起き上がれ、すこしの間にここにいる」
「わたしたち、別れ……えっ？　すこしの間？」

クラインの言葉に耳を疑った。
てっきり、ここに定住すると思っていたから、アリスは言葉に詰まる。
「南へ行く」
「南に？」
「会いたい人がいる。ここでゆっくりと養生して出かける」
「旅、やめないんですか？」
「やめたいのか？」
二人とも、首をぶんぶんと振る。
先にカーセルが墓地から離れ、鍵を取ってくるから、家の前で待っていてほしいと言った。
クラインの家の前でしばらく待っていると、カーセルが鍵の束を持ってきて、クラインは家の中へと入る。
入ってすぐ、目の前には大広間が続き、奥には長い廊下が見える。
吹き抜けが三階にまで続いている。天井からは巨大なシャンデリア、壁には絵が飾られている。
「すごい……」
それが二人の感想。
もしこれが夢でないなら、旅の終着地点はここだ。ここで旅の出来事を書物にまとめ、ゆっくりと余生を過ごす。
綺麗に掃除されているが、人が住んでいる気配はない。
長い間、誰も住むことなくこの家はただひたすら主人を待っていた。
大広間の大きな時計が時を刻む音だけが響く。
「ここが、俺の家？」
「中流貴族でも、これほどの豪邸を持てたのはメルヴィルおじさんだけです」
「今はクラインだ。そう呼んでくれ」
中央にある横長のソファを指でなぞりながら、クラインはゆっくりと家の中を見て回る。

「私にとってはメルヴィルおじさんです」
頑固としてそれは譲れないと、カーセルの目が伝えた。
「……好きにしろ。しかし、ここは、なんだか使い慣れた剣を握っているような感じがする」
「難しい表現ですね」
「記憶を無くしても、体が覚えている……」
クラインが目を覚ましたとき、自分が誰かも、ここがどこかもわからなかった。ただし、日常的な動作、食事やトイレなどの基本知識はあった。
ソファに触れたときも、体が、以前同じようなことをしたことがあると覚えているようで、しっくりとくる。
記憶がないものの、ここが自分の家かもしれない、という感覚があった。
さきほどまでは、墓の前に立っても何も感じないの、不思議だ。
こういう感覚を無くしていないということは、自分は偶然に記憶を失ったのではないように思えてくる。
今考えてみると、誰かが記憶を奪った、そんな感じだ。
クラインと名を付けてくれたのは、イーディング神殿の神官だ。
クラインとは、アルミトレミ教の古い言葉で“一部を失った、あるいは全てを失った者”という意味だ。
記憶は存在を確定する重要な要素だ。
一部を失っただけでも人は困惑するのに、クラインのように全てを失ったものは路頭に迷うのが普通だ。
そこで人生を棒に振らなかったのは、クラインの心が強かったということだ。
「こんな家を持ってるなんて、クラインさんはすごいですね」
「レディたち、失礼だがこの人は……」
カーセルが言いかけたとき、クラインは制止する。
「メルヴィルの名は実感が持てない。クラインでいい、記憶を取り戻すまでは……」

「わかりました……。そうだ、今日は家で夕食を。父も会いたいはずです」
「妹、エリスの旦那か……俺は、どんな顔をして会えばいい？」
と、クラインがアリスとチェルシーを見た。
二人はソファに座り、天井を眺めていたので、不意の問いだった。
「わ、わたしたちに言われても……ありのままでいいじゃないですか？」
「ありのまま？　今の俺は旅を続ける傭兵だ。そんな者を、ゼンペラ帝国の貴族が受け入れるのか？」
「父は、あなたの戦友でした……」
「……」
だから、妹を任せることができたのだろうと、クラインは勝手に想像する。
「……わかった。ここで待つから、遣いをよこしてくれ」
「わかりました」
カーセルが去ったあと、クラインは二人を連れて廊下を進み、部屋のひとつひとつを見て確認していく。
「一階は台所と大広間、それにお手伝いさんの部屋ですね」
「らしいな……。俺の家だったら、俺の部屋はどこだ？」
それからクラインの部屋探しが始まった。
五階建ての豪邸。部屋の数は三十を越える。
アリスとチェルシーが下の階から調べ、クラインは最上階から調べようとなり、階段を上って最上階の五階に上る。
意外にいい運動になる。
廊下を進むと、一枚の絵が壁に飾られていた。
小さな絵で、そこに写っていたのは自分と、そして写真の女性……エリスだ。
本当にここは自分の家。
それなのに、それなのに……。
くじけそうになる。

進むにつれて、次々と絵や写真が廊下に飾られている。
ここには多くの記憶が眠っている。思い出が詰まっている。
その一つでも思い出せれば、どれほどこの苦しみか解放されるだろうか。
胸に、鍵穴もなければドアノブのもない扉があり、開けたくても開けることのできない状態。
……もどかしい。できるなら心臓を取り出し、扉を破壊してでも中のものを取り出したい。
廊下の先には大きな扉がある。
ここでこの家の中心である言わんばかりに主張をしているのが肌で感じる。
緊張しているのか、ドアノブを握る手が震える。
ゆっくりとドアを押し、部屋の中を覗く。
緑色の絨毯が敷かれ、真ん中には大きな机。左右には本で埋め尽くされた棚が並び、本棚からちょっと離れたところに書物が積み重ねられている。
部屋に入り、まずは机の側にいって、触れてみる。
自分の机？　それとも、父の……。そういえば、カーセルは父のことを話さなかった。
自分がここにいた頃には、もういなかったのだろうか？
頭を抱えるのをあとにして、本棚に並べられた本を眺める。
歴史書と戦闘教本がほとんどを占め、所々に小説が収められている。
「……ジーンと聖剣」
背表紙にはそう記され、全部で二三巻もある。
「神と神殺し……」
全十二巻。
「……無くした、記憶？」
たった一冊の、気になるタイトルがある。
手に取ろうと、腕を伸ばしたとき、

「絵がいっぱいありましたね？」
アリスの声が、扉の方から聞こえた。
伸ばしかけた腕を戻して、振り返る。
「本当に、俺の家のようだ……」
「そう、みたいですね。この部屋、クラインさんの部屋ですか？」
「わからない。でも、ここの空気は感じたことがある」
「懐かしい感じ、ですか？」
「緊張感。それに、威圧感」
「威圧感？」
「絶対的存在を目の前にして、動けない状態。気分がいいものではない」
出よう、とクラインに腕を掴まれ、あっという間に部屋から連れ出される。
でも、アリスは見つけてしまった。
机の上に、クラインを中心に、家族が写っている写真があった。
廊下には、クラインと、クラインの妹と思われるエリスの絵や写真しかなかったのに、この部屋だけにはこの家のすべてであるかのように、一枚の写真だけが飾られている。
一階から二階までを探索していたチェルシーが大広間に戻り、ソファに座って何かを読んでいるところにクラインとアリスが戻ってきた。
チェルシーは二人がソファに座っても気付かないほど集中して本を読んでいた。
“残った記憶”
チェルシーが読んでいた本だ。
はっとなったクラインがその本を奪い取る。
「あっ！　クラインさん……？」
「……」
無くしたのは思い出か？　それとも記憶か？
それらは本当に無くしたのか？　本当は、渡したのではないのか？

ばん！
思わず閉じてしまった。
「……どうしたの？」
「どこで見つけた？」
「に、二階の図書室みたいなところ。すごい本があった」
「どうしてこれを手にした？」
「テ、テーブルの上に……」
「置かれてあったのか？」
立ち上がり、背表紙を見る。
“戻った記憶”
誰かが、意図的に置いていた……そんなわけない。
そんなわけないのに、誰か、絶対的力を持った者が干渉してきているような気がしてならない。
背中に女神がいる男？　という言葉が脳裏よぎった。
冗談じゃない、いるのは死神だ。
「……読まないの？」
「後で読む」
怖い。
正直、読むのが怖い。
この本に、三年間の旅のすべて詰まっているようだった。
旅が無駄だったと宣言しているようで、開くのが怖い。
……何のために記憶を取り戻したいのだ？
その問いを考えないようにして旅をしてきた。
アリスとチェルシーの旅の理由と変わらず、自分を知るために旅をしている。
では、なぜ自分を知りたい？
自分自身に興味を抱いてもいけないのか？
この問いだ、この問いだけは自答したくない。
旅の理由が消える。俺の生きている意味がわからなくなる。
本から感じるのは、無力と、無駄と、死だった。

過去の記憶に意味がなくなると、クラインの旅だって意味をなさないものになる。なんのために三年間も旅を……いや、二十年間もの間、世界を無視してきたのだ。
本を開くのは怖い。怖いが、いつかは開くことだろう。
本を開くのは、そのいつかで十分だ。
ぐっと本を持ち、五階の、さきほどの書斎に移動して机の上に本を置く。
それから、写真立てを持ち上げ、
「これが、俺。こいつが、妹……残りの二人は、両親か？」
クラインはエリスの肩に手を乗せ、その後ろに両親らしき人が二人の肩に手を当てて笑っている。
「……生きる、意味がほしい」
記憶がほしいのではない、生きる意味がほしい。
誰か、俺に答えをくれ。
膝をつき、涙を堪えた。

接触

「メルヴィル！　本当にメルヴィルだ！」
ファルディレックス家の主、アレクセイ・マルク・ファルディレックスがクラインを迎えた。
アレクセイはクラインと同い年だというが、見た目は親子くらいの差がある。
涙を流しながらクラインと抱擁を交わすアレクセイは、いつまでたってもメルヴィルから離れようとせず、カーセルが苦笑いしながら父のアレクセイをクラインから引きはがす。
メイドからハンカチを受け取り、ぼろぼろと流れる涙を拭き、クラインの肩を何度も叩く。
「お前がいなくなって二十年。エリスがどれほど悲しんだか……おまけに記憶まで失って」
髪の毛が薄いアレクセイは、自分の頭を撫で、クラインの記憶喪失を自分の災難のように顔色を悪くする。
「今まで何をしていた？　二十年もの間？　まさか、二十年前に記憶を失ったと？」
二階の、広い談話室での食事だった。
堅苦しく、長いテーブルの上での食事は嫌だというアレクセイの希望だったとカーセルが言う。
いくつかのテーブルに、ドリンク、オードブル、メンディッシュやデザートが並べられ、招かれたアリスやチェルシーはごちそうを目の前にしてよだれが出そうだった。
「二人のレディは、飲み物はなにがよろしいかな？」
「あっ、いや、勝手に取りますから……」
断る前に、カーセルは二人のウィッツ・ハニーという果実酒のグラスを持ってきた。
三人は、ファルディレックスからの遣い来る前に出かけた。

クラインだって社交性はある。旅の装備のままで貴族の家に行くわけにいかず、クライン、アリス、チェルシーは上等な衣装でドレスアップした。
初めてドレスを着たアリスとチェルシーはやや興奮気味だったが、白いドレス、青いドレスをみにまとい、装飾品を付けて化粧をすれば立派な女性になってしまった。
シェリー石のネックレスがアリスの胸元を飾り、イヤリングがチェルシーをひと際女性としての魅力を引き立たせる。
「アリス、意外に綺麗ね」
「チェルシーは……ちょっとえっち」
「なによそれ！」
きゃあきゃあ騒ぐも、これも一夜限り。
クラインも服装を変えると貴族らしく見えた。
ぼさぼさだった髪も整えてもらうと、男なのに美貌という言葉が合っていた。
「クラインさん、格好いい」
「惚れなおしたか？」
「ほれなお……もう！」
惚れたなんて言った覚えはなかったが、ここで惚れなおしたなんて言ったら、しっかりと気持ちを打ち明けたことになる。それはちょっと恥ずかしかった。
三人はよしと生き込んでファルディレックス家に向かったのだった。
旅衣装では元気のある女の子、という衣装を抱いていたカーセルは驚いた顔をした。
アリスとチェルシーが、意外にも魅力的だったからだ。
馬子にも衣装とは言ったものだ。
「メルヴィル、積もる話もある。エリスのことあるしな……それにしても、若いままだ」
「悪い、アレクセイ子爵。貴方ことも思い出せない」

「それは、残念だ……。まぁ、ここは故郷だ、いつか思い出す」
記憶を思い出すのは、本当にいいことなのだろうか。
ここに来ての話題は、記憶、エリス、そして騎士時代の思い出話。それ以外をアレクセイは話そうとしない。そうやって記憶を戻そうとしてくれている。
「俺とお前が会ったのも兵士時代だった。教官のフレットレイを棒でぶん殴って顎を砕いた。なぜかも覚えてないだろう？　教えてやる。腹筋を鍛えている俺たちに小便をかけようとした。お前は起き上がり、木剣を握った。ことが終わった後、みんなが、どうして股間を狙わなかったと聞いた。お前は答えた。あんな小さな目標に剣を当てることのできる騎士はいない。あれが最高に笑えた、同期の奴らはお前に絶対的信頼を置いたものだ」
「……そんなことをしたのか」
「悪だった。最高の悪だったが、最高の兵士だった」
「最高の兵士？」
「記憶がないんじゃ仕方ないが、ゼンペラと宗教組織の対立があった」
「宗教戦争か？」
「戦争が始まる理由のほとんどは、国土の侵略と宗教の問題だ。しかも、リヴァル・トレイシー教の連中だ。敵の数は二万人」
「二万も？」
「ゼンペラの主導権を委譲しろとの脅迫を、もちろん政府は拒否した。リヴァル・トレイシーはベルファルウとバノクレックスに攻めてきた」
「……俺が、戦線に？」
「勇敢だった。この戦いでお前は帝王に認められ、貴族の地位を手に入れた。まっ、成り上がりだ。純血主義のゼンペラ貴族も、お前だけは認めた」
「有名人か……」
「そうだ。メルヴィル・ファフス、男爵としての地位を得る。小さ

な家をあんな大きな家にした。戦争の英雄、帝国の希望。帝王に何度も食事に誘われた」
「財もあり、名誉もあり、友もいた。……最高の人生だな」
「ああ、お前が消えるまでは、エリスもそう思っていたさ」
「……」
「本当に、なにもかも忘れてしまったんだな……」
ソファにどっと座るアレクセイは、クラインにも座るように顎をしゃくってみせる。
記憶を思い出せる気遣いは感謝するが、今は、ゆっくりと考えたい。
それと、早くキュリアス・イルミティに行きたい。
キュリアス・イルミティの、あの人と話がしたい。
「どうした、飲まんのか？」
グラスを手にしたまま、動かなくなったクラインを心配したアレクセイが顔を覗きこむ。
「大丈夫だ。……今日は、呼んでくれてありがとう」
「なんだ、もう帰るのか？」
「ずっと旅をしてきた。俺の家なら、ゆっくりしたいだろう？」
「……それもそうだな。しばらくいるのだろう？」
「……そのつもりだ」
「ならいつでも会える。記憶が戻ることを祈ろう」
二人はグラスをあわせ、飲み干す。
一方のアリスとチェルシーはがつがつと料理を食べている。
旅では精進が基本。
こんなにおしそうな――――実際においしい料理を目の前にして、女の子らしく、なんてものは通用しない。驚いた目で見ているメイドを無視して食べまくる。
……元気で、可愛い子だ。
カーセルは顎に手を当て、微笑んだ。
嫁にするなら活発な女がいいと、父が言ったのを思い出す。

食べたい物を食べ、飲みたい物を飲んで、べろべろに酔ったアリスを抱きかかえるカーセル。家まで送るとために、馬に乗ってクラインと並走する。
「おじさん、また旅に？」
「アレクセイにはああ言ったが。ここに居ても、記憶は戻らないと思う」
「次は、どこに？」
「……神々の島」
「キュリアス・イルミティ！？」
クラインの後ろに乗っていたチェルシーがびくりと反応を見せ、ぎゅっとクラインを掴む。
緊張して、尾がぴんと張り、背筋がぞくぞくとする。
キュリアス・イルミティ――――神の住む島、戻ることのできない、死の島……。
「どうして、そんなところに？」
「前に行ったことがある。そこである人に、お告げを受けた」
「お告げ？」
「……記憶を作れ、そう言われた」
「それは、どういう意味ですか？」
「わからない。わからないから、もう一度聞きに行く」
「……キュリアス・イルミティから、戻ってきたなんて」
「あそこのことはあまり言えない。出来事、どういうところ、ということも」
「聞きたくありませんよ、怖くて」
「利口だ」
家に着き、カーセルがアリスを一階の客室にベッドに寝かせる。
チェルシーも隣のベッドに座り、カーセルにありがとうと言う。
談話室に戻り、クラインと対したソファに座る。
手にはボトルを持ち、台所からグラスを持ってきて、酒を注ぐ。
「俺は、十七年間も眠ったままだったのか？」

「そのことですが、どういう状況で目を覚ましたのですか？」
グラスを渡して、カーセルは一杯ぐっと飲み干し、二杯目を注ぐ。
目が覚めたときのことは、つい最近のことにように覚えている。
森の中で、手元には一本の剣、周辺には死体。
「……目を覚ましたとき、周りには死体が数多くあった。今考えると、あそこはイーディング神殿の近く、聖性が宿る森、死体は腐敗することはない」
「聖職者は、あの森に埋葬されることが多い。魂が消えても、肉体が消滅することのないところ……時の止まった場所？」
「……わからない。わからないから、キュリアス・イルミティに行くのだ」
「あの子たちを置いて？」
「あの子たちと会ったのは数日前のことだ、それほど情はない。彼女たちは、自由に旅を続ける」
「あなたに惚れてる」
カーセルにだってわかるものを、クラインだって気付かないわけがない。
「知っている。いや、知らないと思い続けていた。旅の仲間なんて、いつかは離れる。情を見せるわけにはいかない」
そう思っていたのに、感情など、記憶と同じでなくなっていたと思ったのに……。
「あの子たちが好きですか？」
「……三年間の旅の中で、たったの数日であれほど打ち解け奴はいない。初めて笑ったよ、彼女たちと出会って……そのたびに、少しずつ何かを思い出した」
「彼女たちが？」
「……リオという名前に、聞き覚えは？」
カーセルは頭を振る。
「では、レミナは？」
「レミナ？　……いいえ」

「その名前だけを思い出した。てっきり最初は、写真に写っていた女性かと思ったが、実際は違った」
「本当に、人の名前ですか？」
「どういう意味だ？」
「町とか、物の名前である可能性は？」
「……ありえるな」
「彼女たちと一緒にいると記憶が戻るのであれば、一緒に旅をするべきだ」
「……そうかもしれない」
話はそこで終わった。クラインが突然真剣な顔をして悩みだしたために、カーセルはこれ以上何も言えなくなった。
「帰りますね」
その言葉も、クラインには届いておらず、仕方なく家を出た。
考えることは山ほどあるのに、答えは何一つ出てくることはない。
なぜ十七年間も眠っていた？　いや、本当に眠っていたのか？
十七年間、なにかをしていたのでは？　十七年間、老いることがなかったのでは？
そして、なぜ記憶を失った？
記憶を作れとは、どういう意味だ？
リオとは？
レミナとは？
ふと思うのは、記憶を取り戻すのではなく、作ればいいという言葉。
記憶を、取り戻す？
誰かに奪われたのか、という疑問。
そんなことがありえるのだろうか。
見つからない答えを盲目のまま探し続けるかのように、クラインは悩んだ。
あきらめられない。
自ら問いを出して自ら答えるということは、意外にも難儀なこと

だと、クラインは目を閉じてしまうが、そのまま眠ってしまった。
が、すぐに目が覚めた。
目を閉じて一時間ほどで、眠りを邪魔する雑音が発生したのだ。
突然強い風が玄関の扉を揺らし、クラインを起こした。
今夜の天気はいいはずだったのに、いきなり変わった。
外に出て見ると、月明かりが明滅しているように思えるほど、雲の流れが速い。それに風が……、
「風が、東に吹いている？」
……馬鹿な。
東には海がある。波によって風が発生し、風が吹くなら東から西へ、だ。
こんな天候は、少なくとも帝都ではありえない。
夢でも見ているのかと勘違いしそうになった。
外に出て、風を浴びると頬がちくちくと痛い。
西の砂が混じっている。
砂漠の方から風が吹いているとは、異常だ。
不審に思いながら部屋に戻ると、家の奥の方からも音が聞こえる。
風が吹いている音が、二階の奥の部屋から聞こえる。
クラインは階段を上り、音がする部屋の扉を開ける。
天井につるされた光属性結晶のランプが闇に反応して発光し、部屋を照らす。
五階の、机と本棚のある部屋と変わりのないような部屋で、窓が開いていた。
「アリスかチェルシー、締め忘れたのか……」
机の横目に窓に向かおうとしたとき、ぱらぱらという音が聞こえた。
机の上に、本が開いて置かれていた。
「……」
扉を開けたとき、本はあったか？
幻覚や幻聴、余計な夢を見るようになったら、旅は止めようと決

めていた。
とりあえず本を読む。
記憶を取り返したいのなら、再びあの地に戻るのだ。
一行を読んで、やっと気付いた。
「まさか……ライオール？」
ページが風によって捲られる。
世界を救うために戦うか？
「ライオールなのか？　本当に、お前が？」
ページは捲られる。
記憶を求めるのか？　それとも、生きる意味を求めるのか？
「両方だ、両方ほしい」
世界を救え。
「世界など救っても、俺は救われない」
世界を救え。そのために戻るのだ、あの地に。
「ライオール！」
風がページを捲るも、そこに文字はない。白紙で、何も書かれていない。
ライオールが……神が接触してきた？
俺に、記憶を作れと言ったあいつが、戻って来い？
話をしたいことはたくさんあった、あの言葉の意味を聞いてみたかった。
キュリアス・イルミティに戻ろう。
ライオールは、自分の意志をわかっていたのか？
いや、違う、ライオールはこの家に来たときには話しかけていた。
小さなきっかけを見通すなと教えてくれたのもライオールだったが、最初の兆候を見落としていた。
チェルシーの持っていた本……違う、五階の書斎、あの本のタイトルが最初の兆候だった。
本という手段を使って、俺にキュリアス・イルミティに戻るように言ってきた。

しかし、今のはどういうことだ？　世界を救えとは、どういうことだ？
なにか大事があったのだ。でなければただの人間に声を掛けるはずがない。
クラインは窓を閉めず、急いで五階の書斎に戻り、机の上に置いた本を手に取る。
次のメッセージがここにあるのではないかと思ったのだったが、
「……白紙だ」
さきほどは文章がびっしりと書かれていたのに、今は白紙になっている。
背表紙には“再来”と書き換えられている。
……間違いない、ライオールが呼んでいる。
いや、キュリアス・イルミティの者たちが呼んでいる……。
「……んっ？」
アリスが目を覚ましたのは、玄関の方で音がしたからだ。
ドレス姿のまま眠ってしまって、しわだらけだ。
「もう、やだぁ……」
早い内にしわを伸ばしておきたい。
大きなあくびをして、眠気まなこをこすって部屋から談話室を覗きこむ。
「……クラインさん？」
誰もいない。違う、誰かが出て行った。
玄関まで急ぎ、扉を開けると、クラインが馬に装備を取り付けていた。
「クラインさん！」
強い風に、アリスの髪、衣服が乱れる。
外に出ることも難しい風の中、クラインはアリスに振り向きもせずに馬に跨り、振り返りもせずに走って行ってしまった。
「ど、どうしたのよ……」
置いて行かれたの？

不安と、それに絶望感が襲ってきた。
突然クラインがいなくなった。それも、別れも言わずに去っていく。
あわわ、と焦ることしかできなくなったアリスは、とりあえず部屋に戻ってチェルシーのベッドに飛び乗る。
「いったぁ！？　ア、アリス、なんの真似よ！？」
「クラインさんが行っちゃった！」
「はぁ？　なによ？」
「クラインさんが馬に乗って行っちゃったの！」
「……えっ！？　どこに？」
「わかんないわよ！」
泣きそうになるアリス。それに、どうするべきかと悩むチェルシーではあったが、頭の中には二つの選択しか残っていない。
追いかけるのか、待つのか……である。
二人とも待つという行為はあまりすきではない。我慢強い方でもなく、短気な方だ。
「追いかけよう」
チェルシーは真剣な目を向ける。
「でも、クラインさん、どこに行ったの？」
「……キュリアス・イルミティ」
「……えっ！？」

乖離

真正面から風を受けながら西に進み、貿易通行路の道を南に進んでドゥルノン王国に行く。そこのアーギュン軍港からキュリアス・イルミティへ船で渡る。

金さえ出せば、船頭は船を出してくれる。それが駄目なら買えばいい。

それにしても西から風が吹いているのかが気にある。

これもまた兆候のはずだ。何者のかが干渉してきているということなのだろうが、この兆候の意味を理解できない。馬もつらそうなほどの向かい風を受けながら、とにかく走る。

西のライム砂漠にはなにがあったか思い出す。

あそこにはただの砂漠、砂以外になにもなかった気がする。

ライム砂漠を縦断、横断したこともないから何とも言えないが、でも、神様がいたという話を、旅の中で聞いたことがある。

ライム砂漠には風の神ジャーシートが眠っている。

風で旅人の行く手を阻む、などという噂を旅の中で聞いた。

ジャーシートは細い体に四肢を有する竜の容姿をして、その体に似つかわしくない巨大な翼で風を起こす。

怒りに身を任せ、砂漠の砂を巻き上げて世界を襲う。

そんな云われも思い出す。

「神が、なぜ怒る……」

弱まることのない風の中を二時間走り続け、ライム砂漠と草原の境目を見つけて南へ進む。すると、風が弱まり始めた。体についた砂を払い落し、ふと、アリスとチェルシーを思い出した。

出て行くところをアリスに見られた、もしかしたら追ってくるかもしれない。

いや、そんなことはない。ここが別れだと知り、自分たちの目的を果たすだろう。

もう二人のことを気にするな、自分の為に旅を続けてきたのだ、彼女たちは関係ない。
さらに馬を走らせること二時間。あと一時間も走らせればドゥルノン王国の領地に入る。
馬を休ませるために、木が数本だけ残っている場所で腰を下ろし、雲に隠れた月を眺める。
「ライオール……」
なんの目的があって接触してきた？　どうして目的を言わない？
世界を救えとは？
それに、ジャーシートが怒る理由はなんだ？
教えてくれ。
馬に水を与え、ポーチから光属性結晶を手にして明かりを灯す。
マップを取り出して現在位置を確認し、ルートを指でなぞって、最後にキュリアス・イルミティを指す。
「……」
馬に乗り、腹を蹴る。
走ってすぐに雨が降ってきた。
風の次は雨かと、行く手を遮られているようで嫌な気分だ。
見上げると空には雨雲。先ほどまで月が見えていたのに、恐ろしい天候だ。
神の手が自分に覆いかぶさっているようにしか思えず、ふと、ゼンペラ地方には多くの神がいることを思い出す。
ライム砂漠の風の神ジャーシート、グレッドファレストの雨の神キュクレ、サンゼリクス火山の火の神ラフォーク、ティバーン沼地の雷の神セーレン……彼らが、邪魔をしている？
神が、キュリアス・イルミティへの進路を妨害している？
ここの神のほとんどは地守神――――大陸の神であり、その土地から離れることのできない神々。
また、キュリアス・イルミティから追放された神々でもある。
神が住む場所は、マップには記されていないがクラインは覚えて

いる。
冗談ではない、突然どうしたというのだ？　ゼンペラに訪れたのが、そもそもの間違いだったのか？
神の怒りに触れる理由がまったく見当たらない中、激しさを増す雨に耐え、神の試練だと解釈して進む。
一時間、雨と格闘してドゥルノン王国の領地に入ると雨はぴたりとやんだ。
ますます怪しくなってきた。
陽が昇るまでもう少しだけある。
森の中に入り、マップを取り出して、一応、神が住む場所はこの先にないかと確認する。
「……テスラ渓谷」
ドゥルノン王国、都市オードルーマにはテスラ渓谷を通る必要がある。
流れる川に身を投げる者が多く、そこに眠る川の神アテラスが腕を引いて川に引きずる、などと云われる。
ここを通らなくても都市に行ける道はあるが、渓谷を迂回するとなると山に登る必要がある。渓谷自体、神などを無視すれば危険な場所ではない。
腰に帯びる魔剣に触れ、頼りにしているぞと心の中で言う。

一方、アリスとチェルシーは大急ぎで着替え、出立の準備をしていた。
「風がおさまらない……」
手綱を引き、アリスとチェルシーは馬と一緒に平原の、巨大なクレーターの中で縮こまっていた。
都市ベルファルウから出て来たはいいが、ドゥルノン王国へのルートはよく知らず、マップを開いた瞬間、風に吹き飛ばされた。それでもとりあえず南へ行こうとしたが、横風が強く、馬も思わず倒れてしまった。

わが身が一番だと、今はクレーターの中で風がおさまるのを待つ。
けれども、風は一向に収まる気配を見せない。この間にもクラインはどんどん南下していると思うと、這ってでも追いつきたかった。
「……向かい風になるけど、西に進んでから南に行った方がいいわ。でないと山にぶつかる」
アリスはマップを無くしたが、チェルシーはしっかりと持っていた。
時間と月の位置と方位で現在地を知り、南に行くと山に囲まれるので東に行こうとチェルシーが言うもの、この風の強さでは動けない。
「風がやむまではここでじっとした方がいいわよ」
「でももう少しで森があるはず。そこに入れば風も気にせず南下できるわ」
クラインの進んだルートでなく、南西に進み、森に一直線に入ることにした。
「……わかった、行きましょう！」
早くクラインに追いつきたい。
……会ってどうするのだろう？　という疑問は浮かばなかった。とりあえず、会えばなんとかなるし、なにか聞きたいことも浮かぶだろう。
能天気なのかもしれないが、二人はこれでクラインとのお別れ、などというのは嫌だった。

「……アテラス」
頭から漆黒のぼろぼろの外衣をかぶり、両手で巨大な鎌を握る。身の丈はクラインの二倍、渓谷の川の上に浮き、胡坐をかいている。
表情は見ることはできないが、赤い瞳が光っているのだけがわかる。
明らかにこちらを見ている。
クラインがテスラ渓谷に到着すると、風も雨もなく、空気が乾い

ているようで、口の中の水分まで持って行かれそうで、砂漠を思い出した。
空は夜空が綺麗な晴天なのだが、遠くの空を見るとまだ雨雲が残っている。
テスラ渓谷に入り、アテラスを見つけると、急に馬が怯え出し、クラインの握る手綱を噛み切り逃げていった。
アテラスに近づかないようにと、遠回りをして進もうとしたのに、
「神殺しのクライン」
アテラスの第一声は、クラインに新しい疑問を与えた。
「……」
「神々が君に恐怖している」
立ち上がり、水の上を歩いて近づいてくる。
がしゃがしゃと、外衣の中で音がひしめき、ちらりと斧や剣が見える。
「アテラス、俺の素性を知っているのか？」
「己の歩んできた道を見失った」
「なら、貴様が言ったことを、俺が理解できると？」
「理解する必要はない、推測すればいい。今になって、神々が騒ぎ出した理由を……」
くくくっと笑うと同時に、かちかちという音が聞こえる。
まるで、髑髏が笑っているようだ。
「君の肉体、魂は滅びることがない。クライン、僕はメッセンジャーだ、お前に手を出すことは許されていない。だから、行く手も阻むことはできない。だが、これだけは覚えておけ」
「……なんだ？」
「キュリアス・イルミティの神は、君を殺す」
アテラスはまた笑い、ゆっくりと川に身を沈めていき、消えた。
久しぶりに神を見たことと、神が話しかけてきたことに、クラインの心は大きく揺れ動いていた。
自分は、神々の厄介事に足を突っ込んでしまったのではないかと、

心配になった。
アテラスの言うように、渓谷は無事抜けることができた。
すぐ目の前には都市オードルーマがある。
太陽が頭を見せた。
今日中にキュリアス・イルミティにたどり着くことができる。

「やった、森だ！」
アリスとチェルシーは森を見つけてほっとした。
森の中に入ると風はほとんどない。これなら順調にドゥルノン王国に到着する。
キュリアス・イルミティへは船で行くしかない。クラインがキュリアス・イルミティへと行くと言っても、船を出してくれる船頭はそうはいないはずだ。
アリスがクラインを最後に見たとき、背中からは野心と探究心を感じた。クラインは船を買い、自ら漕いででも行くだろう。
問題は、自分たちがどうやってキュリアス・イルミティに行くか、だ。
どうすれば船を借りられるだろう。船頭を騙すのか？　そんなことが自分たちにできるだろうか？
今後を考えながら森の中を走っていると、突然、雨が降ってきた。
「最悪！」
髪が濡れることを極端に嫌がるフェリス種のチェルシーはぶつぶつと文句を言う。
「セリッシュ・イーンの精霊よ、我が身を加護する盾に転じて我らを守れ！」
透明なシールドがアリスとチェルシーの直上に展開され、雨を凌ぐ。
本当はチェルシーの方が発音はいいので魔法もアリスよりも強力なものが発揮されるが、チェルシーはあまり魔法を覚えていないし、覚えようともしない。

発動したシールドは剣、矢などを防ぐことはできないが、雨くらいならどうということはない……はずだが、
「すごい豪雨！」
シールドが軋む音を立てているが、大丈夫、いける。
「ドゥノルンまでは二時間くらいかかる。テスラ渓谷を抜ければすぐそこには都市よ」
「クラインさん……」
どうしたんだろう、どうして突然出て行ってしまったのだろう……。

「キュリアス・イルミティまで乗せて行ってほしい」
「……旦那、本気か？」
クラインがゼンペラ金貨を数枚取り出してちらつかせると、ぐっと拳を握って、船頭は誘惑と戦っていた。
しかし誰もが金貨の誘惑に勝ち、クラインの頼みを断る中、ただ一人、挙手をしたものがいた。
「俺が行く」
肌の黒い、海の男そのものだと思わせる風貌をした男だ。
クラインは都市オードルーマのアーギュン軍港から近い、漁師場にいた。
挙手をして、クラインを船に乗せると言いだしたのはドゥルノン王国の海兵隊だ。
「……乗せて行くだけでいい。帰りは結構だ」
そう言って、手のひらいっぱいの金貨を男に渡す。
「こんなにも出して神々の島に行く奴がいるとは思わなかった」
「二年前に一度訪れている。今すぐに船を出してほしい」
「いいだろう、スティンガー・クライン」
「ス、スティンガー！？」
強靭な海の男である漁師が、クラインの名を聞いて顔色を悪くする。

「俺を、知っているのか？」
「二年前、どうやってあの島に行った？」
そう問われると、答えは今と同じだ。
海兵隊に頼み、高速艇で島に向かった。
そうか、こいつはそのときの男……。
クラインは順調にキュリアス・イルミティに向かうことになった。
海兵隊のリーゴォ・トマーシュとクラインが高速艇に乗り込んだ瞬間、海が荒れた。それも、ここ一体だけで、遠くの海は平然としている。
「どうなっていやがる……」
「行こう。こんなもの、ドゥルノン王国の海兵隊には問題ではないだろう？」
「ああ、もちろんだ！」
が、リーゴォの顔は引きつっていた。
高波が軍港を襲い、波浪警報が都市で発令された。
「船長！　こんなときに偵察任務ですかぁ！？」
リーゴォは船員に任務だと言ったようだが、こんなときに船を出す海賊も漁師もいない。
「馬鹿野郎！　この程度の波でびびってどうする！」
「ポセイドンの怒りですよ！」
「神なんかいやしねぇよ！」
風属性結晶で動く軍用船は、風によって進路が妨害されることはないが、荒波には対抗するには船員の技量に左右される。
船内で、両足に力を入れて揺れに耐えながら、クラインは鞘を手にして剣を抜く。
鏡のような輝きを持ち、平行の峰には事細かに呪文が刻み込まれている。
これらの呪文は攻撃、防御、援護魔法などに別れており、通常は自動で発動する。
剣の持ち手が危険になれば防御魔法を起動し、シールドを発動す

る。攻撃の意志を感じ取れば攻撃魔法を起動し、火炎弾や雷撃弾を発動する。
クラインは指でそれらの呪文をなぞる。
なぞられた呪文は白く光り出す。
「……」
剣先から柄までが発光し、すぐに消えた。
それから、クラインは詠唱することなく、広域に防壁魔法を展開し、嵐からこの船を守る。
「なぜ邪魔をする……なにがあるのだ」
剣を鞘に収める。
腕を組んで、揺れの収まった船内でじっと到着するのを待つ。

「渓谷だわ」
テスラ渓谷が見えたとき、雨が止んだ。
ずっとため息をつくチェルシーは、濡れた髪をタオルで拭く。
「クラインさんは、もうキュリアス・イルミティに着いたのかしら……」
「クラインさんなら着いてるかも」
一歩を踏み出して渓谷に入った。
「お嬢さん」
「わっ！！」
横から声を掛けられた。
突然のことに、二人は真横に跳ね、瞬時に剣を抜き取る。
「脅かしてすまない。お二人はどこに向かうのかな？」
黒い外衣を頭から羽織った青年で、手に杖を持っている。
まるで魔法使いの風貌だ。
「あの、都市に……すいません、先を急ぐので」
剣をおさめ、早めに会話を切り上げて先に進みたかった。それなのに、青年の赤い瞳に吸い込まれ、動けなくなっていた。

なにかの魔法かと思ったが、視線を外せばそんなこともなくなった。
「僕もオードルーマに用があってね、ただ、この渓谷の抜け方をよくわからない……」
青年は渓谷を見渡し、どこがオードルーマに繋がる道なのかわからないでいる。
この渓谷は、ゼンペラ帝国から入いれば、川に掛けられた橋を渡ればすぐで迷うことにはない。しかし、彼はだいぶここで迷い続けたらしい。
足元が土で汚れている。
本当は無視したいが、困っている人を見捨てるわけにもいかない性分の二人は、仕方なく青年と共に渓谷を抜けることにした。
青年は、外衣と同じように黒い馬に跨る。
「僕の名前はアテラス、短いけど、よろしく」
「アリスです」
「わたしはチェルシー、よろしく」
感じのいい青年で、悪い人には見えない。
けれども警戒を解くわけにはいかない。本当はアテラスという青年に構うつもりはない。
青年のことよりも、クラインのことが頭から離れない。
「僕は旅をしていてね、みんなは止めるが、神々の島に向かおうと思う」
青年は一方的に話をしたのだが、その言葉を簡単に無視することはできなかった。
「か、神々の島に！？」
思わず「自分たちも向かっている」と、言いそうになったが、話題を膨らませるつもりもなく、事情を教える必要もないので口を閉じた。
「驚くのも無理はないだろう。僕は五年間、世界を旅して、最終地点を神々の島、キュリアス・イルミティにした」

「ど、どうしてキュリアス・イルミティを終着地点に？」
「噂では、キュリアス・イルミティから戻ってきた者はいないと聞く。だから、死の覚悟を持って島に行く。どんなところか見てみたい」
「す、すごいですね」
まさか、オードルーマに着いた直後にキュリアス・イルミティに向かう、なんてこと言わないだろう。どうしても、アリスとチェルシーは今日中にキュリアス・イルミティへと向かはなければならない。
でなければ、二度とクラインを会えない気がした。

「波が……」
微動しない海面に、静止した雲。
先ほどとは違い、時が止まったようで、リーゴォは辺りを見渡してほかに船がないかと目を凝らす。
太陽と磁石で現在地はわかる。この辺りは普段、波があり、多くの船舶が行き来する海域なのに、今は気持ちの悪いくらい海面は静かだ。
キュリアス・イルミティの聖域に入ったと、全員、空気から異常を感じ取ることができた。
「旦那、島が見えてきた」
クラインを甲板に呼び、霧に囲まれた島に船首を向ける。
それほど大きくはない、常に霧で囲まれている絶海の孤島、キュリアス・イルミティ。
霧の中に進めば戻ってくることはできず、島に踏み入れることなど不可能とされている。
「……ここまでいい、ボートを借りる」
「いいのか？」
「帰れなくなるぞ？」
「……」

そういえば、前のときも途中まで乗せてボートを貸した覚えがある。
リーゴォ自身、これ以上進むなど願い下げだったからちょうどいい。
それにしても、一生に二度もキュリアス・イルミティに行く者を初めて見た。
「では、迎えにはいかない」
「助かった」
クラインはボートに乗り移り、小さな声で詠唱するとボートはキュリアス・イルミティへとすべるように進みだし、徐々に船足が早まっていく。
「……あいつ、本当に人間か？」
船首を港に向けたとき、リーゴォは舌打ちをしてクラインの背を見た。

「ここがオードルーマか。ありがとうございました」
アテラスはひどく感動していた。都市にきたことが、よほど嬉しかったらしい。
「いえ、では私たちこれで……」
「ええ」
と、アテラスは一礼する背を向けたが、進む方向が同じだ。
まさか、これからすぐにキュリアス・イルミティに向かうというのか？
彼と一緒に行動することが嫌なのではない。彼の目的が、キュリアス・イルミティではなく、自分たちにあるようで怖いのだ。それに、さきほどからチェルシーが怯えている。
堕性を感じるようなのだ。
魔法使いならそれなりの魔導倶を持っていてもおかしくないが、もしかしたら、彼自身からそれを感じることができるとしたら危険だ。

「どうする？」
「彼に接触しないようにしましょう。なんか、怪しくなってきた……」
「でも港に行くのよ？　絶対会っちゃうわよ」
「それはそれで……行くわよ？」
二人は走り出した。
とにかく、あの男よりも先に船を見つけてキュリアス・イルミティに行った方が得策だ。これ以上関わるととんでもない目に遭うかもしれない。
しかし、実際に港に行っても、誰もキュリアス・イルミティへ乗せていってくれる船頭はいなかった。それに、差し出した金額も少ない。とてもじゃないが、これで命を危機に晒すことなどできないと言う。
それなら船を奪うしかない。そう決断したとき、
「どうしました？」
「うわっ！！」
声を掛けてきたのは、アテラスだった。
またもや視界の外からだったので、跳びはねて距離を開ける。そして、アテラスの顔を見て、会ってしまったと、二人は動揺し、震えた。
さて、どうする？
「どうしました？」
「いや、あの、船を……」
「船？　船で、どこへ？」
「いや、それが……」
これ以上言い訳できない。
アリスはため息をつき、
「ごめんなさい。実はわたしたちもキュリアス・イルミティに行くの」
「君たちも？　どうして？」

「会いたい、人がいるんです」
「そう……覚悟があるんだね？」
「それは、あります」
「……船が確保できた。本当に覚悟があるなら、一緒に行くかい？」
「……」
願ってもないことだが、都合がよすぎると、疑問の目線をアテラスに向けるも、断ることはできなかった。
「……なんてこった、今日で四人もキュリアス・イルミティに向かう」
船頭はドゥルノン王国の海兵隊の、リーゴォという男だった。
「ま、まさか、クラインさん？」
「スティンガー・クラインだ。なんで知ってる？」
「もしかして、君たちの会いたい人って……」
「……」
「クライン……」
アテラスは、なにか感心するかのようにクラインの名を口にする。
クラインを乗せていくときはすごい荒波だったのに、今は静かだ。風も落ちてきているが、進むには十分だ。
アテラスはクラインと自分たちの関係に興味を持つと思っていたが、何も話してこない。甲板に立ったまま、ずっと船の進路先を見つめている。
チェルシーは堕性を感じるとアテラスには近づかず、ずっと船の中にいたが、アリスはあることが気になってアテラスを見つめていた。
クラインは渓谷を通ったはず。
なぜ会わなかったのだ？　それに、クラインを知っていながら、そのことを話そうともしない。普通なら、リーゴォのように聞いてくる。
クラインになにかしらの思い入れがあるような口ぶりをするアテラス。

不思議な人だ。
「悪いが、キュリアス・イルミティに接岸することはできない。途中からボート行ってもらう」
「あっ、はい、わかりました」
「……神々の住む島とは、どういうところだと思う？」
アテラスが、背を向けたまま話しかけてきた。
「……美しく、醜いところ」
クラインがそんなことを言っていたのを思い出す。
「そんな話を、聞いたことがある。果たして、美しく、醜いとはどういうところだろうな？」
「それは、行ってみないとわからないんじゃ……」
「美しい場所なのだろうか、醜い場所なのだろうか、そこに住む者は、本当に神なのだろうか……」
「どういう、意味です？」
「いや、ただの想像だ。僕だって、初めて行くんだから」
「アテラスさんは、どうしてキュリアス・イルミティに？」
「……会いたい人がいる。会って、真実を教える。先ほど、許しが出た」
「真実？　許し？」
「今まで、真実を伝えることも、触れることも許されなかった。彼が混乱し、世界を消してしまう可能性があったからだ。けれども、今になって許しが出た」
「それで、真実を伝えてどうするんですか？」
「迷うだろう。僕の言葉か、彼らの言葉か……それは、彼の判断をゆだねるしかない」
「その、彼っていうのは……」
「ボートを出す、ここからは自力で行ってくれ」
リーゴォが船を止める。
船の向かう方には、霧に包まれた島がある。
あれが、キュリアス・イルミティ……。

三人はボートに乗り込むと、アテラスが詠唱し、ボートは勝手に進みだす。
「……世の中には恐れ知らずの連中が多すぎる」
リーゴォは身ぶるし、あんな連中と関わる自分は変人に思えてきた。
「……」
アテラスは無言を貫き通す。
堕性を感じると耳を震わせて怯えるチェルシーはアリスのかげに隠れ、アテラスを見ようともしない。
アリスも、腰の短剣の柄に手を乗せ、いかにもそれが自然の体勢であるかのように見せる。
ボートが霧の中に入ったとき、アリスとチェルシーは、体にまとわりつく霧に不気味さを覚え、ぶるぶるっと身を震わせる。
「神の領域に入った……平然と平和な地で暮らし続ける、臆した神々が住むキュリアス・イルミティ。今になってクラインを使うとは……」
「……えっ？　アテラス、さん？」
アテラスの雰囲気が一変した。
ボートが急加速し、島へと進んで砂浜が見えた。
「クラインに伝えることがある。アルティミエルも、このままでは危険だと判断した」
「な、なに……？」
アテラスは砂浜にボートを寄せ、ひょいっと飛びおり、遠くを見た。
アテラスの視線の先には白い、雪がかかったような山がひとつ、ぽつんとあった。
砂浜はここ一帯にしかなく、すぐ先には森がある。
「アテラスさん、あなたは……」
「もし、クラインがどうしようもなくなったら、君たちがクラインを救うのだ」

「どうしようもなくなったら？　救う？」
「クラインは世界を破壊するかもしれない」
「……はっ？」
まったくわからないことをアテラスはぶつぶつと一人ごとのように言うが、しかし二人に教えているような口ぶり。
問いただしたいところもあるが、アテラスの雰囲気からそれは許されなかった。
アテラスは杖を砂浜に突き刺し、頭からかぶった外衣を脱いだ。服装は外衣と同じく真っ黒で、ぴったりと体に密着している。
細身のアテラスは、杖を持つと歩き始めた。
アリスとチェルシーはどこに行くべきなのかと迷った。このままアテラスについて行くべきなのか、それとも別々の行動を取るべきかと思ったとき、ふと、アテラスとは違う足跡を砂浜に見つけた。
クラインの足跡？
足跡は森に入らず、森の周りを歩いて、山の方へと進んでいる。
アテラスは森の中に入ろうとしたが、アリスとチェルシーは森に入らず、クラインの足跡を追うとしたが、
「僕について来る方が得策だ。離れると、醜いものを見ることになる」
振り返り、杖を向けて言う。
「だって、あなた、怖いです……」
チェルシーの震えはずっと続いたままだ。
外衣を脱ぎ、魔導倶の何一つ持っていないことを知ってからは、さらに恐怖感を覚えた。
それに、アテラスの瞳は真紅に輝いていた。
「僕が怖いんじゃない。クラインだ」
「……」
否定できなかった。
アテラスも怖いが、クラインはもっと怖い。
考えてみれば、クラインは普通ではない。

ゼンペラ帝国では騎士としての地位を持ち、英雄という名誉まで持つ。帝王とも面識があるというのだ。
おまけに記憶を失い、十七年間も眠り続けたあとは傭兵として自分探しに旅を続け、コレーヴァル王国でも英雄として知られている。おまけに、傭兵としてはスティンガーの異名を持つ。
キュリアス・イルミティに行き、戻ってきて、魔剣を腰に帯び、背中には女神までいる。
非情で冷徹で非常識なことに違いないクラインを好きなことに変わりはないが、怖くないといえば嘘ではない。
クラインは恐怖の対象だ。
怖くて、時々触れたくなくなる。仲よくして、自分たちが敵ではないと教えるために話をする。それが今までだった。
「クラインさんは、何者ですか？」
ぐっと拳を握り、アリスは尋ねる。
「僕が誰か、わかりますか？」
「いえ……」
アテラスの周りに空気が変わった。
黒い靄が掛かったようで、アリスにも、チェルシーの感じる恐怖が伝わってきた。
一歩、二歩と下がり、アテラスとの距離を開ける。
「アテラス・タナトス。キュリアス・イルミティから異端視された存在」
一瞬だけ、容姿が変わった。
背中に黒い翼を有し、両手は骨になり、まさに死神の風貌だった。
「あなた……」
述べるべき言葉を見失い、この人と戦っても勝つ見込みがないと瞬時に思い知らされた。
そういう判断をここできなかったら、二人とも剣を構えて、死んでいた。
まさに神の成せる幻影を見せられたようだ。

「クラインと話をする。そのために君たちが重要だ」
「ど、どうしてわたしたちが？」
「なぜだか、クラインは君たちと接触してから記憶を取り戻しつつある。危険な兆候だ」
「記憶を取り戻すことが、どうして危険なんですか？」
「……クラインは世界を救うために契約した、蒼き魔神と。代償として記憶を失った。代わりに絶大な力を得て、敵と戦った」
「いっ、意味がわかりません。クラインさんに、何が……」
「まずはクラインと会う必要がある。話は、それからだ」
アテラスは迷いもなく、道を知っているかのように森の中に入っていく。二人はその場で立ち尽くすこともできず、ついていくことになった。

再来

「……クライン、久しいな」
「ライオール」
クラインが船で砂浜に乗り上げ、降りたとき、船は勝手に海へと戻っていってしまった。
魔剣を腰に帯びていることを確認し、森沿いを歩いて山のふもとに到着した。
そこには透き通った白い石で建てられた巨大な神殿が聳え立っている。
まさに神々の暮らす場所と、クラインはここが神の聖域であることを再認識させられる。
それから神殿の中に入る。
聖堂を思わせる造りで、多くの長椅子が並べられ、奥には祭壇がある。天井は光属性結晶で作られ、非常に明るい。
祭壇には純白の服を着て、長い銀色の髪を持つ男が一人、背を向けて立っていた。
男はクラインが近づくと振り返り、ふっと笑って見せた。
「お前から接触してくるなんて、どういうつもりだ？」
「あの二人と出会うからだ」
ライオールは笑みを消し、表情にすこしの怒りがにじみ出ている。
「二人……アリスとチェルシーか？」
「記憶を取り戻しつつある」
「なんだ、どういうことだ？　記憶を取り戻していけないのか？」
柄に手を乗せたクラインに、
「まぁ、落ち着け……」
クラインの両肩に手を乗せ、ぐっと椅子に座らせる。
「何から話したらいいか……お前は二十年前、ある神と契約した」

「契約……そうだ、アテラスが言っていた」
「アテラスか……お前が契約したのは蒼き魔神だ」
「蒼き魔神？　何を契約した？」
「力を得る代わりに、記憶を失った。」
「……二十年前に契約して、三年前に記憶を失ったと？」
「十七年間、お前は世界を救うために戦った。そして契約通り、記憶を失った」
「世界を救うために？　なぜそんなことを？」
「それは教えられない。記憶を代償に力を得たのだ。ここで記憶を与えることは契約違反だ」
「……では、俺の肉体が老いなかった理由は？」
「魔神との契約で得た付加価値に過ぎない」
「……」
「どうした、聞きたいことはそれだけか？」
聞きたいことはまだある。けれども、記憶を失った理由が世界を救ったなどという下らないものだったと知って、自分自身に失望した。
「……俺が、記憶を戻すことに問題があるのか？」
「魔神に命を奪われる」
「俺だけが知らない。ライオール、お前は俺を知っているのだろう？　教えてくれ」
「では、私と契約しよう」
「契約？」
「そうだ。キュリアス・イルミティ以外の神々を殺せ」
「……なんだと？」
「キュリアス・イルミティに住まない神々は異端視された存在だ。だから殺せ、大陸の神々を殺せ。我々には邪魔な存在だ」
「……」
「大陸の神を殺し、蒼き魔神を殺せば、記憶を戻してやる」
「……」

「どうする？」
「なぜ、今になって？」
「お前は十七年間の間で戦い、心が傷ついていた。その気持ち、再びを与えるなど、わたしには酷なことだ……」
「俺のことを気遣った、なんてことは言うな」
「どうする？」
キュリアス・イルミティの聖なる神々と、大陸の異端された神々……。大陸の神々はキュリアス・イルミティから追放された神々だ。しかし、大陸の神々は大陸に住む人々を守っている守護神だ。
それを殺すとなると、大陸は神々の恩恵を受けることがなくなり、不作や洪水、人々の怒りや憎しみが大陸を埋め尽くようになる。
それなのに、ライオールは殺せという。
「……キュリアス・イルミティの神々だけで、このカーンバル大陸を支配するというのか？」
「支配ではない。見守るのだ」
「……」
「悩むがいい。お前が決断……」
と、言葉を止め、ライオールがはっと顔を上げて、天井を見渡す。
「……どうした？」
「招かれざる者が、来たようだ」
「招かれざる……あの二人か？」
頭に浮かんだのは、アリスとチェルシーだ。
「それと、邪魔者が一人……」
「……」
「クライン、悩むのはなしだ、今すぐ決めろ」
「なぜだ、どうした？」
「どうする。契約するなら、この剣を握れ」
ライオールは異次元から黒い鞘を引き出し、両手で持ってクラインの前に差し出す。
「なんだ？」

「聖剣だ。神々を殺すことができる」
「……」
「邪魔者は、アテラスだ」
「なに？」
テスラ渓谷を通ったとき、アテラスはなにもしてこなかったのに、今になってどうしたというのだ？
しかも、アリスとチェルシーと一緒だということに、クラインは自分でも理解できない怒りを覚えた。
「どうやら、二人のレディをたぶらかしてキュリアス・イルミティに戻ってきたようだ」
悩む、悩むさ。
世界の為に戦うなどと思ったことなどない。しかし、自分の為に世界を潰そうと思ったこともない。結局は中途半端な奴なのだ。優柔不断で、いざというときに決断を出せない。考えないと前に進めない男なのだ。
剣を取って、大陸の神々を、殺すのか？
「時間がない。アテラスは、二人を殺すぞ？」
……それだけは、許されない。
顔を伏せ、剣を取った。
ライオールは笑みを浮かべ、よろしいと腕を叩いた。
これで決まりだ。
大陸を支配する神々を殺す。そして、記憶を取り戻す。
また、色々と考えた。
ライオールが何か企んでいるが、契約した以上、自分が神々を殺したあと、しっかりと記憶を戻してもらう。できなければ、殺すまでだ。
「アテラスを殺せ。契約を果たせ」
聖剣を手にしたのだ、もう戻ることはできない。
「……もし、俺が契約を果たせなかったらどうなる？」
「お前を殺す」

「……」
この者に負けるほど、クラインだって弱くはない。
今になって、アテラスの神殺しの言葉が、嫌に離れないし、そこに何か兆候があったのではないかと考えてしまう。
契約した以上、もう考える必要などない。
大陸の神々を殺すだけだ。
「クラインさん！」
神殿に響く声に、クラインは聞きおぼえがあった。
たたたっと走ってきたのは、もちろんアリスとチェルシー、それに黒い服装の男。男から感じる気配は、アテラスと同じものだ。
アリスとチェルシーは二人も震え、クラインに近づこうと一歩を踏み出そうとするが、怖くて近づけない。
「クライン」
男はアリスとチェルシーの間を通って、杖を両手で握りしめて近づいてくる。
「アテラスか？」
「そうだ」
「人質にでもしたつもりか？」
「何を言っている？　彼女たちは自分の意志でここに来た。そして、僕は君に言うことがある」
「いまさら、何の用だ？」
「アルティミエルが……クライン、その剣はなんだ？」
ふと、クラインが手にする剣から恐怖に似たものを感じた。
「アテラス、遅かったな。クラインは私と契約した」
「契約……まさか！？」
「貴様らは死ぬ運命にある」
「クライン！　君は騙されている！」
「なんのことだ？　アテラス、お前は何を知っている！」
「君は戦った！　我々と、世界を救うために！」
「お前たちと？　どういうことだ？」

アテラスが近づこうとすると、ライオールはクラインの肩に手を乗せ、何かと耳元に囁いている。
「クライン、ライオールの話など聞くな！」
「アテラス、俺はお前たちを殺す」
「よせ！」
クラインが黒い剣を抜くなり一瞬にして接近し、アテラスを攻撃範囲に捉えた。
くっ、と表情を歪め、杖でクラインの重い攻撃を防ぎ、高く跳び、後退する。
アリスとチェルシーの前に立ち、
「クライン、騙されている！」
「なにも言わない、なにもしない」
「だからこうやってここに来た。説明しに来た」
「もういい、お前たちを殺し、記憶を取り戻す」
「クラインさん！」
いけない！
チェルシーはクラインの体からにじみ出る黒いもの、堕性にがたがたと震えた。
雰囲気が一変した。
血に飢えた獣、今のクラインなら自分たちも簡単に殺してしまう。なんの躊躇もなく、切り殺す。
絶対的恐怖に、アリスとチェルシーは動けなくなり、アテラスが、
「……クライン、なぜ話を聞かない？」
「三年待った。三年待ったのに、お前たちは俺に接触することはなかった」
「君は記憶を代償に力を得たのだ！　その記憶を戻すなど、我々にはできない！」
「もう十分だ。キュリアス・イルミティに異端された神よ」
駄目だ、クラインはライオールに侵されている。
目が死者に近く、光を失いつつあるクラインを見て、アテラスは

失望し、諦めた。
「アリス、チェルシー、逃げよう」
「逃げる？　逃げるって！？」
アテラスは二人の肩に腕を乗せると、詠唱する。
「逃がすな！」
ライオールが叫ぶ。
迫ってくるクラインに、アリスは、自分たちも斬られると覚悟して目を閉じた。が、何も起きない。もう殺されて、あの世に行ってしまったのだろうかとも思った。
目を開けると、先ほどまでいた神殿ではなく、別の場所にいた。
「……ここ、どこです？」
洞窟の中で、周辺に光属性結晶が散らばっており、明るく、洞窟は長く続いている。
「話がある」
アテラスは歩く。
二人は戸惑いながらも、アテラスについて行く。
「二十年前、キュリアス・イルミティの神々が我々に宣戦布告をしてきた」
突然の言葉に、二人はすぐに理解することができなかった。
「……えっ？　なに？」
アテラスは、二人の反応を気にせず話し続ける。
「我々大陸の神はキュリアス・イルミティから追放された神だ。我々は、この世界は人がいるから神がいるという考えを持っていたが、それを上位神が許さず、追放された」
二人は疑問を抱くこともできない、大きな事実を知ってしまった。
「戦争が起きれば大陸は壊滅するほどの規模になる。そうなる前に事態を処理して起きたかったが、我々単体ではキュリアス・イルミティに行くことはできない。だから今回は君たちと一緒に行った」
一息置き、
「戦争が起きるとなったとき、一人の青年が神々の戦いを聞きつけ

た」
「まさか、それが、クラインさん？」
「まだメルヴィル・ファフスだったときだ。彼は正義感があり、人々が神々の都合で死ぬのは見たくないと、できることはないかと言ってきた」
「今のクラインさんからは想像もつきません」
「だろうな」
洞窟は長く、終着地点が見えない。
「メルヴィルは人間だ。神々は人間との契約により、神本来の力以上の力を与えることができる。メルヴィルは……今のクラインは、破壊神と呼ばれる蒼き魔神、アルティミエルと契約し、圧倒的な力を得た」
「魔神……」
「力の代償として、蒼き魔神はクラインに尋ねた。何を代償にする、と。クラインは、自分の記憶と言った」
「まさか、記憶喪失って」
「そうだ。クラインは記憶を代償に世界を救った。十七年間も、キュリアス・イルミティの神々と戦った」
「そんな、クラインさんが……」
「キュリアス・イルミティの最上位神を殺したとき、契約通り、記憶を奪われた。目が覚めたとき、クラインは記憶を失っている。周囲に神々の下僕の死体がある状態で、目を覚ました」
「クラインさんは、それから旅を……」
「クラインは今、大陸の神々を殺そうとしている。大陸の神々は、大陸に住む人々を支えている。私だって、死の神だが、死者が現れたとき、迷わぬように道を作るのは私の仕事だ。我々がいなくなれば、大陸は滅び、キュリアス・イルミティの、支配された世界が生まれる」
「そ、そんなのって……」
「キュリアス・イルミティの神々は今でもクラインに怯えている。

以前、クラインが訪れたときにもクラインを殺すことができなったし、干渉もしたくなかった」
「ど、どうして今になって？」
アテラスは立ち止まり、振り返って、
「君たちが現れた」
「……えっ？」
今のところ、アテラスの言葉は衝撃的で、次の言葉が予想すらできなかったが、今の言葉には、心の奥で察することができた。これだけは予想できたと、アリスとチェルシーはお互いのゆっくりと顔を見合わせる。
「クラインは、君たち出会って記憶を取り戻し始めた。だからキュリアス・イルミティの神々は、自分たちが敵だと認識され、また殺されるのでないのかと恐怖した」
「そ、そんな……」
「クラインは一度キュリアス・イルミティに訪れている。記憶を取り戻したとき、クラインは怒るだろう。特に、雷撃神ライオールには……」
あの、銀色の長い髪を持つ男の人だろう。
よくは見えていないが、あまり良い印象を持てる人――神ではなかった。
「ライオールは記憶が戻ることに恐れ、記憶を求めるクラインの心に漬け込み、契約した。我々を殺すことで、記憶を与えると」
「そんなの、そんなのずるい！」
チェルシーが拳を握り、叫んだ。
「今のクラインの目は死者と同じだ。ライオールに侵食され始めた。時を置かずして、クラインは理性を失い、戦いだけを生きがいとするようになる」
「嫌です！　そんなの絶対に嫌！」
クラインが、好きだ。
たった数日しか一緒にいなかったけど、ずっと一緒にいたい。共

に旅を続け、いつか安住の地を見つけ、共に暮らしたい。
そんなに人を好きになったことなどない。
クラインと一緒にいたい。
「なら、君たちが止めるしかない」
アテラスは、微笑んだ。
「止める？」
「……クラインを殺せ」
言葉が武器になるというのは、こういうことだろう。
千本の矢が、胸に突き刺さったかのように、痛む。
私たちとクラインの旅は、始まってもいなかった。
今までが序章でしかないことを、知ってしまった……。

再来（後書き）

はじめて書きますから、なにを書いていいのか……とりあえず、上編が終わり、ということです。

お読みいただき、誠に感謝いたします。

以上です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9315l/

アリスとチェルシーの物語

2010年10月13日20時14分発行